

佐倉印西線(緊急地方道路整備) 埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

—佐倉市岩名町前遺跡—

平成16年3月

千 葉 県 土 木 部
財団法人 千葉県文化財センター

佐倉印西線(緊急地方道路整備) 埋蔵文化財調査報告書

—佐倉市岩名町前遺跡—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第490集として、千葉県土木部の佐倉印西線緊急地方道路整備事業に伴って実施した佐倉市岩名町前遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代から古墳時代の住居跡や中世の土坑墓が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土の歴史を理解するための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年3月25日

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡　例

- 1 本書は、千葉県土木部による佐倉印西線（緊急地方道路整備）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、佐倉市下根955-1他所在の岩名町前遺跡（遺跡コード212-042）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人 千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査と整理作業の実施期間及び担当者は本文中に記述した。
- 5 本書の執筆・編集は、東部調査事務所上席研究員 石倉亮治が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課及び教育振興部文化財課、千葉県土木部印旛土木事務所、佐倉市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 佐倉市都市計画図 1/2,500
第32図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」・(N 1-54-19-10-1)・「成田」(N 1-54-19-10-3)
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成14年撮影 1/10,000のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の内容は、挿図中及び本文中に記載した。
- 11 岩名町前遺跡の基本測量は日本測地系仕様による。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の経緯.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺遺跡.....	1
第3節 岩名町前遺跡の調査.....	3
第2章 遺構と遺物.....	5
第1節 住居跡.....	5
1号住居跡.....	5
2号住居跡.....	8
3号住居跡.....	10
4号住居跡.....	12
5号住居跡.....	14
6号住居跡.....	15
7号住居跡.....	15
8号住居跡.....	17
9号住居跡.....	20
第2節 その他の遺構と遺物.....	22
円形周溝状遺構.....	22
方形周溝状遺構.....	22
土坑墓.....	22
1号溝状遺構.....	22
2号溝状遺構.....	22
方形溝状区画.....	26
遺構外出土遺物.....	26
第3章 まとめ.....	32

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第16図 6号住居跡出土遺物	16
第2図 調査区及び遺構配置図	4	第17図 7号住居跡平面図遺物出土状況及びセクション図	18
第3図 1号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図	6	第18図 7号住居跡出土遺物	18
第4図 1号住居跡出土遺物（1）	6	第19図 8号住居跡平面図遺物出土状況及びセクション図	19
第5図 1号住居跡出土遺物（2）	7	第20図 8号住居跡出土遺物（1）	19
第6図 2号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図	9	第21図 8号住居跡出土遺物（2）	20
第7図 2号住居跡出土遺物（1）	9	第22図 9号住居跡平面図及びエレベーション図	21
第8図 2号住居跡出土遺物（2）	10	第23図 円形周溝状遺構	23
第9図 3号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図	11	第24図 方形周溝状遺構	23
第10図 3号住居跡出土遺物	11	第25図 土坑墓及び出土遺物	24
第11図 4号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図	13	第26図 1号溝状遺構	24
第12図 4号住居跡出土遺物	13	第27図 2号溝状遺構及び出土遺物	25
第13図 5号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図	14	第28図 方形溝状区画及び出土遺物	27
第14図 5号住居跡出土遺物	14	第29図 遺構外出土遺物（1）	29
第15図 6号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図	16	第30図 遺構外出土遺物（2）	30
		第31図 遺構外出土遺物（3）	31
		第32図 印旛沼周辺の主な弥生時代遺跡分布図	37

表目次

第1表 印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡	36
--------------------	----

写真図版

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 図版1 航空写真 | 図版7 2号溝状遺構 |
| 図版2 岩名町前遺跡近景 (S→N) | 方形溝状区画 |
| 岩名町前遺跡近景 (俯瞰) | 図版8 1号住居跡出土遺物 |
| 岩名町前遺跡近景 (N→S) 及び1号溝状
遺構 | 2号住居跡出土遺物 |
| 図版3 1号住居跡 | 図版9 3号住居跡出土遺物 |
| 2号住居跡 | 4号住居跡出土遺物 |
| 3号住居跡 | 5号住居跡出土遺物 |
| 図版4 4号住居跡 | 6号住居跡出土遺物 |
| 5号住居跡 | 7号住居跡出土遺物 |
| 6号住居跡 | 図版10 8号住居跡出土遺物
遺構外出土遺物 (1) |
| 図版5 7号住居跡と方形周溝状遺構 | 図版11 遺構外出土遺物 (2) |
| 8号住居跡 | 図版12 遺構外出土遺物 (3) |
| 9号住居跡 | 土坑墓出土遺物 |
| 図版6 円形周溝状遺跡 | 2号溝状遺構出土遺物 |
| 土坑墓 | 方形溝状区画出土遺物 |
| 1号溝状遺構 | |

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

千葉県土木部は、佐倉市下根955-1地先において佐倉印西線道路改良事業を計画し、千葉県教育委員会に遺跡の有無を照会したところ、当該地先が岩名町前遺跡の一部に含まれることが確認されたため、千葉県教育委員会と協議の結果、事業地区内の埋蔵文化財の取扱いについて記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、次の組織と担当者により実施された。

平成12年7月1日～平成12年10月31日 包蔵地3,800m²、古墳1基。

北部調査事務所長 石田廣美、副所長 石倉亮治、研究員 川端保夫

また、整理作業は、本年度刊行分として弥生時代から古墳時代の集落跡、中・近世の土坑墓及び溝状構を中心以下の期間及び組織と担当者により実施された。

平成15年10月1日～平成15年11月30日

東部調査事務所長 折原繁、上席研究員 石倉亮治、研究員 黒沢崇

なお、本報告書の整理作業及び報告書の刊行にあたっては、事業者の都合により古墳を除く集落を中心とする包蔵地部分についてのみ実施した。

第2節 遺跡の位置と周辺遺跡

岩名町前遺跡（第1図）は、下総台地北部にある印旛沼南東岸の中央排水路と鹿島川に挟まれた標高27m前後の台地上に位置する。本遺跡のある台地周辺は、『W』字状の印旛沼の西の沼側から南に延びる鹿島川の東河岸に広がる低湿地に面しており、同じ台地の奥には西の沼を見下ろす縁辺部に土浮古墳群、西の沼と東の沼を結ぶ中央排水路沿いの縁辺部に萩山古墳群、中央排水路が大きく『U』字状に屈曲する付近の縁辺部に飯田古墳群など古墳時代後期の遺跡がある。

印旛沼西岸や鹿島川流域及び新川流域を中心に弥生時代中期から古墳時代前期の遺跡が数多く展開していることが知られている。今回調査された岩名町前遺跡の位置する印旛沼南東岸地域では、弥生時代の遺跡の調査例は僅かであり、これまでその実状については解明されていない地域である。

本遺跡の南東1km程のところには、現在は京成佐倉駅北側の新興住宅街となっている岩名天神前遺跡において弥生時代中期（須和田期）の再葬墓の存在が確認されている。岩名天神前遺跡は、北東に印旛沼に開く支谷や西には鹿島川の沖積低地がひろがる標高30m程の台地上の遺跡で、7か所の土坑のうち6か所から壺形または甕形土器を使用した再葬の痕跡が認められたことから弥生時代中期の墓制の一端が明らかにされた。なお、岩名天神前遺跡の周辺では同時期の集落の存在は確認されていない。

古墳時代以降は様々な時期の多くの古墳が周辺地域に築造されてくる。

今回調査を実施した岩名町前遺跡の弥生時代及び古墳時代の包蔵地上には古墳時代前期の古墳である岩名4号墳（第1図1）が所在している。周溝まで含めた規模は直径22m、高さ2.6mの円墳である。さらに県道佐倉印西線を挟んで東の台地には平成11年に（財）印旛都市文化財センターによって調査が実施され



第1図 遺跡位置図

(1:2,000) 250m

た岩名2号墳（第1図2）及び3号墳（第1図3）があり、2つの古墳はいずれも古墳時代前期末の方墳であることが確認されている。岩名2号墳は墳丘規模は周溝を含めると南北32.9m、東西32.6mで墳丘の高さは3.1mである。墳頂から木棺直葬と思われる埋葬施設が検出されている。岩名3号墳は周溝まで含めた規模は南北15.4m、東西16.6mで墳丘の高さ0.8mである。2号墳に比べて残された墳丘は小規模なものとなっているが、墳頂からは木棺直葬と思われる埋葬施設が検出されている。現在、岩名運動公園となっている付近にはかつて岩名1号墳が所在していたとされるが、詳細は不明である。

県道佐倉印西線沿道の丘陵部には古墳時代中期の前方後円墳で全長約37mの山崎ひょうたん山古墳があり、県道を挟んだ本遺跡の南の台地先端部には平成13年に（財）千葉県文化財センターによって調査された古墳時代後期の岩名5号墳（第1図4）が確認されている。

岩名町前遺跡では当初予測されていなかった弥生時代の集落跡が検出されたことで、今回の調査対象とはなっていない計画路線の西側の畑にも同時期の集落跡の主要部分が包蔵されていることが予測される。また、岩名町前遺跡では同時に古墳時代前期の集落も検出されていることから、本遺跡が弥生時代から古墳時代に至る変遷期の集落であり、印旛沼西岸地域や鹿島川及び新川流域の弥生時代の遺跡に見られる他地域からの影響をどの程度反映しているのかが注目される地域の遺跡でもある。

第3節 岩名町前遺跡の調査

1 調査区の設定

岩名町前遺跡の調査区の設定は基本測量の成果をもとに、公共座標を基準とし調査範囲に対応して20m×20mの方眼中グリッドを設定し、北から1, 2, 3, …、西からA, B, C, …とし、1A, 2B, 3C, …と呼称した。また、各方眼グリッド内を北西端から南東端にかけて通し番号を振り、先頭の00グリッドを含む列を第1段第1列とし、5列ごとに次段の西端に移り、00グリッドから44グリッドまで5段5列の25分割小グリッドを設定し、遺構の検出や遺物の取り上げの際の基準とした。

2 調査の概要

岩名町前遺跡の調査は、平成12年7月3日から平成12年10月31日まで実施され、そのうち平成12年8月11日まで確認調査を実施し、その後平成12年10月31日まで本調査を実施した。

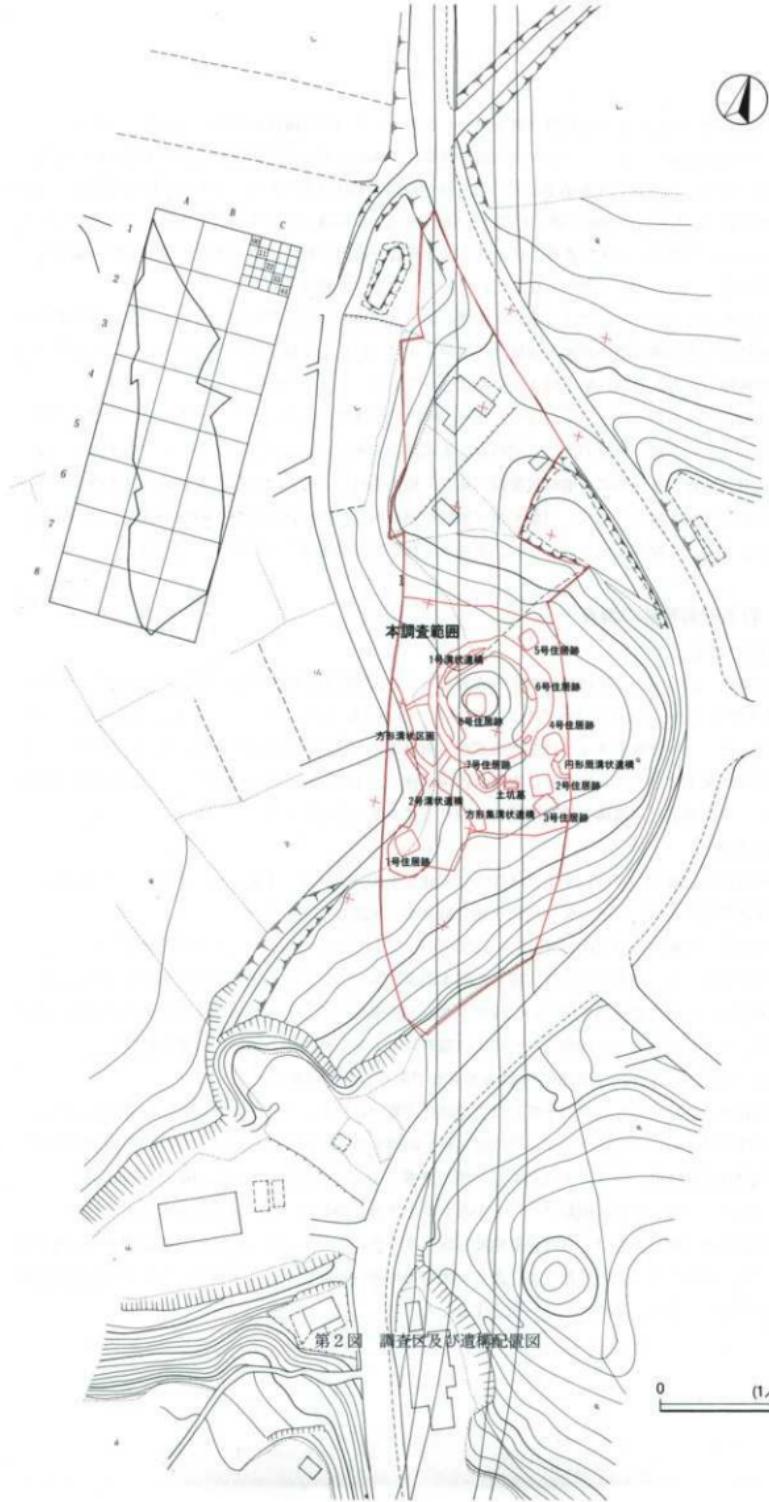
調査対象面積3,800m²のうち10%に相当する380m²の上層と、2%に相当する76m²の下層それぞれについて確認調査を実施した。調査にあたり実施した基本測量に基づき、設定した調査対象事業用地内の方眼グリッドを対象に、上層の確認調査は2m×2mのグリッドを95か所設定し、下層の確認調査では上層の確認調査で設定したグリッドのうち19か所について武藏野ローム層上面までの遺物の有無を確認した。

その結果、古墳1基を含む1,584m²の本調査が必要であることが判明した。

上層では当初塚とされていた小高い土盛りは古墳時代前期の円墳であることが判明し、包蔵地内には弥生時代後期の住居跡4軒、古墳時代前期の住居跡3軒、時期の特定が困難な住居跡2軒、円形周溝状遺構1基、方形周溝状遺構1基、中世の土坑墓1基、溝状遺構2条、方形溝状区画1基が検出された。

なお、下層についてはいずれの確認グリッドからも検出された遺物はなく、確認調査で終了した。

また、岩名町前遺跡の調査は、当初包蔵地及び塚1基を想定したものであったが、確認調査の進捗とともに塚は古墳であることが判明したため、調査対象事業用地内を網羅する基本測量と合わせて古墳周辺について地形測量を実施し、10cmコンター図を作成した。



第2図 淋井区及歩道網配図

第2章 遺構と遺物

第1節 住居跡

1号住居跡 (SI-001)

1号住居跡（第3図）は調査区の南西端の台地縁部に位置し、他の住居跡とはやや離れている。

平面形 調丸方形

規模 長軸 4.4m

短軸 4.2m

深さ 0.24m

付帯施設

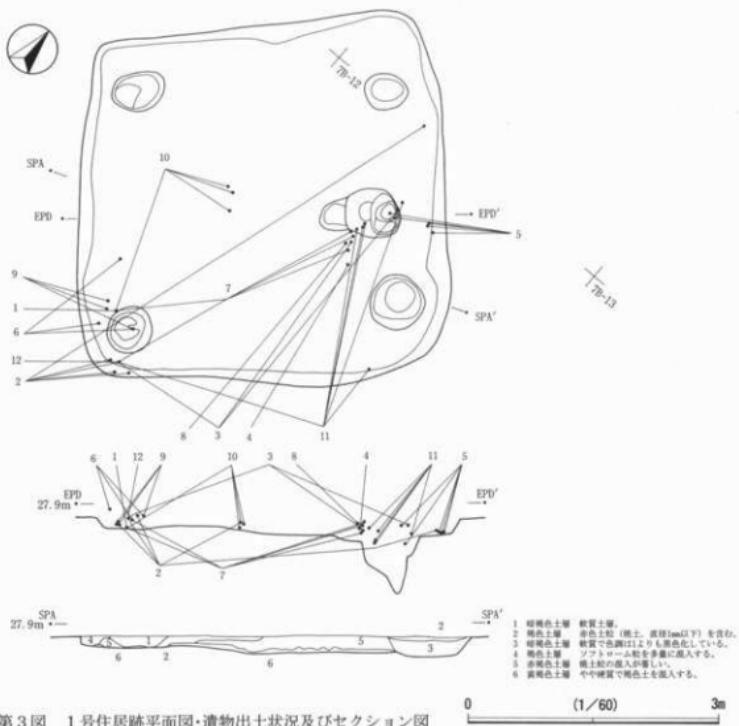
炉の痕跡は検出されていない。柱穴は4か所のコーナー付近にそれぞれ1か所づつ確認された。また、北東辺部付近には開口部の規程が長径1.0m、短径0.6m、深さ0.7mの柱穴状の掘り込みがあり、この付近の覆土中から多量の焼土が検出されている。

出土遺物

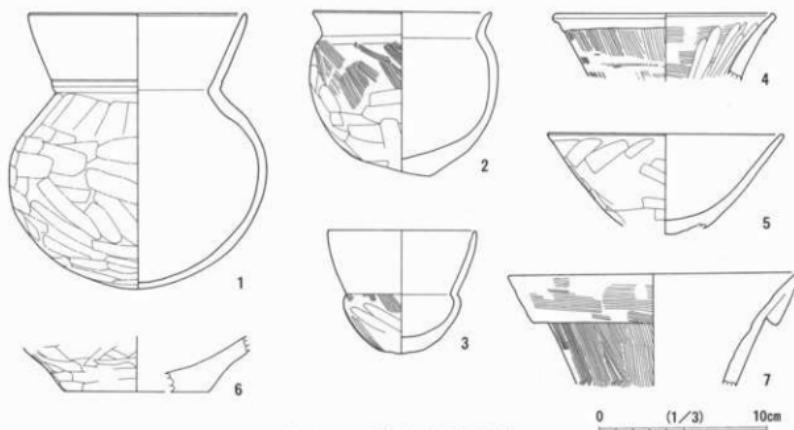
遺物は住居跡のほぼ全域から出土しているが、北東コーナー付近に集中する傾向が見られる。遺物番号の1・2・8・10の各土器が比較的床面に近い位置から出土している。

第4図1は球洞で丸底の小型壺形土器である。口径12.8cm、器高16.2cm、口縁部内外面の一部に赤彩の痕跡が認められる。胴部外面は上位で縦方向のヘラ削り、中位で横方向のヘラ削り、底部付近では斜方向のヘラ削りとなっている。ヘラ削りによる器面調整は縦方向→横方向→斜方向の順で重ねられている。2は小型壺形土器である。口径10.5cm、底径4.6cm、器高9.6cmで胴部外面には上半部を中心として繊細な刷毛目が見られ、胴下半部はヘラ削りによる調整が認められる。底部は平底を意識した作りとなっているが口縁に比べて大きく傾斜しており不安定な形状の要因となっている。胴部外面の上半部には刷毛目が見られ胴下半部では横方向のヘラ削りを重ねている。3は小型丸底土器。口径8.9cm、器高7.2cm、口縁部高3.8cmで内外面ともわずかに赤彩の痕跡が認められる。口縁部の高さは胴部の高さよりも大きく、胴部は小さくて浅い形状となっている。胴部外面は若干の刷毛目の痕跡とその上に重ねて施された斜位のヘラ削りの調整となっている。4は壺形土器の口縁部で、口径13.3cm。外面は縦方向の刷毛目が見られ、内面には横方向の刷毛目の上からヘラ状工具の先端を使用した縦方向のミガキ調整が見られる。5は高壺の壺部のみの遺存で、口径14.0cm、壺部高は8.0cm。外面は斜方向のヘラ削り調整である。6は壺形土器の底部で、底部径は8.6cm。外面はヘラ削り調整である。7は壺形土器で、複合口縁となっている。口径16.3cmで外面は縦方向の刷毛目が密に施されている。内面は剥離が著しい。

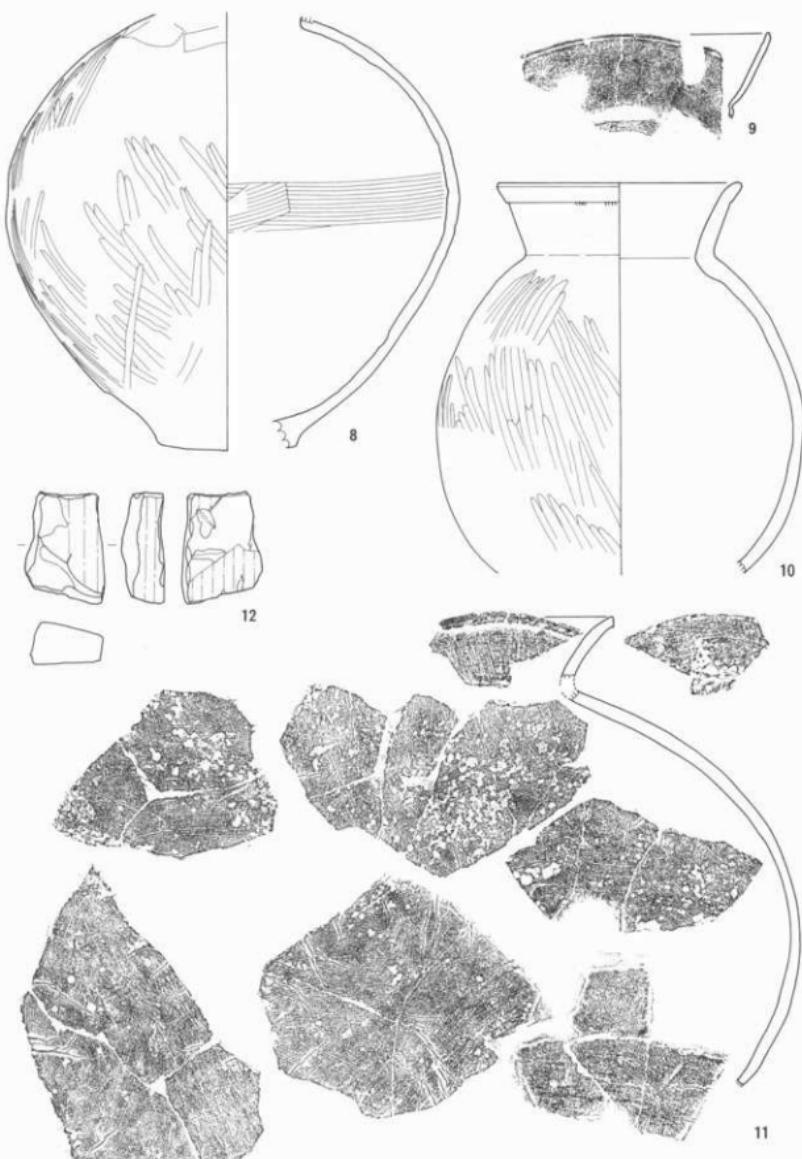
第5図8は壺形土器で口縁部が欠損しており、胴部の最大径28.8cm、底部径8.3cm。胴部外面はヘラ状工具の先端を使用したミガキが見られる。胴部内面は中央部に幅広のヘラなどで痕が一条明瞭に残されており、胴上半部と下半部の接合面を補強するための成形痕と思われる。9は壺形土器の口縁部。口唇部に小さな段を有する。10はやや長胴の壺形土器で、口径14.3cmで底部付近を欠損している。胴部外面に二次焼成痕が認められる。口縁部は複合口縁で縦方向の刷毛目をなでにより消している。内面はなで調整。11は球洞



第3図 1号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図



第4図 1号住居跡出土遺物(1)



第5図 1号住居跡出土遺物(2)

の壺形土器。口縁部は胴部接合部から大きく『く』の字状に外反する。口縁部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目が見られ、胴部外面は縦方向の刷毛目、横方向の刷毛目、斜方向の刷毛目が交差している。12は砂岩製の砥石で表面には使用痕が明瞭に確認できる。遺存部は長さ6.5cm、幅4.2cm、厚み2.6cm。

2号住居跡（SI-002）

2号住居跡（第6図）は本遺跡の東端に位置し、隣接して3号住居跡が検出されている。本住居跡の覆土の一部は後世に削平されているがその規模は小さく、覆土の主要な部分には影響を与えていない。また、本住居跡は緩やかに南に傾斜する台地の縁辺に位置するため覆土は北から南にかけて徐々に浅くなる。

平面形 方形

規模 長軸 3.9m

短軸 3.9m

深さ 0.25m～0.5m

付帯施設

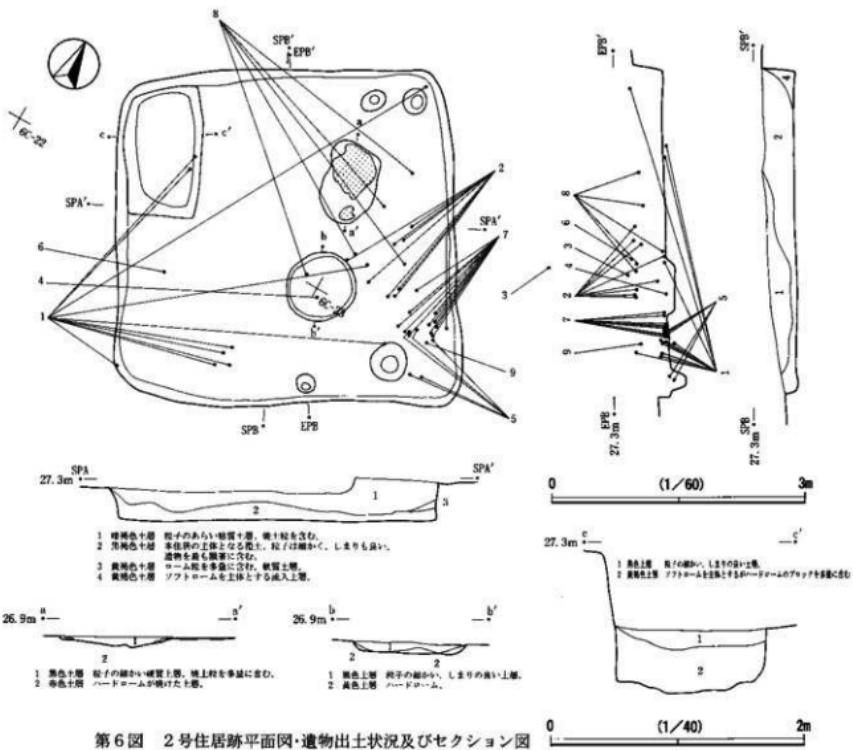
炉は本住居跡中央部からやや北寄りに位置する。規模は0.9m×0.6m×0.1m。また、炉の南には底面の安定した浅い土坑がある。規模は0.84m×0.8m×0.12m。また、西のコーナーに接して平面長方形の土坑が検出されている。規模は1.56m×0.9m×0.7mで、この土坑からの出土遺物は検出されていない。柱穴は北と東の各コーナー付近にそれぞれ2か所づつ確認された。

出土遺物

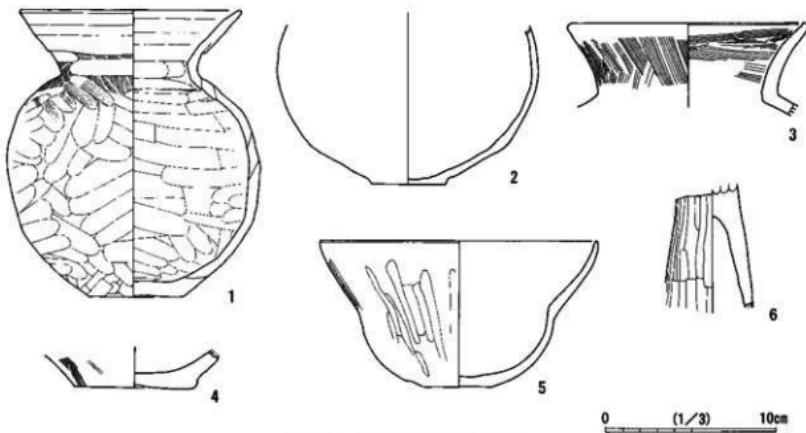
2号住居跡の出土遺物は本住居跡東コーナー付近に集中している。遺物番号の1・5・7・8・9の各土器が比較的床面に近い位置から出土している。

第7図1は小型壺形土器。口径12.8cm、底部径5.5cm、器高16.7cm。複合口縁を持ち、口縁部外面は縦方向の刷毛目の上に横方向のなで調整が見られ、口縁部内面は横方向のなで調整。胴上半部外面は縦方向ないし斜方向の刷毛目の上からなで調整、胴下半部はヘラ削り後のなで調整となり、底部付近では斜方向のヘラ削りのままの調整となっている。胴部内面は横方向の丁寧ななで調整となっている。胎土は密で焼成は良好。2は小型壺形土器の胴部。胴部最大径は15.4cm、底部径4.5cm。内外面とも器面が擦れおり調整痕は明確でない。3は壺形土器の口縁部。口径は14.2cmで外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目が見られ、内外面とも赤彩の痕跡が認められる。4は壺形土器あるいは壺形土器の底部付近。底部径は7.0cmで外面には最下部まで刷毛目が認められる。5は小型丸底土器で口径16.4cm、底部径4.1cm、器高8.5cm、口縁部高4.0cm。口縁部外面から胴部外面にかけてヘラ状工具による粗い削り調整が縦方向に認められる。全体の器形は関東地方の古墳時代前期に現れる小型丸底土器と似似する。6は高壺の脚部。壺部と脚部の据を欠損している。外面には粗いヘラ削りの調整が縦方向に認められる。

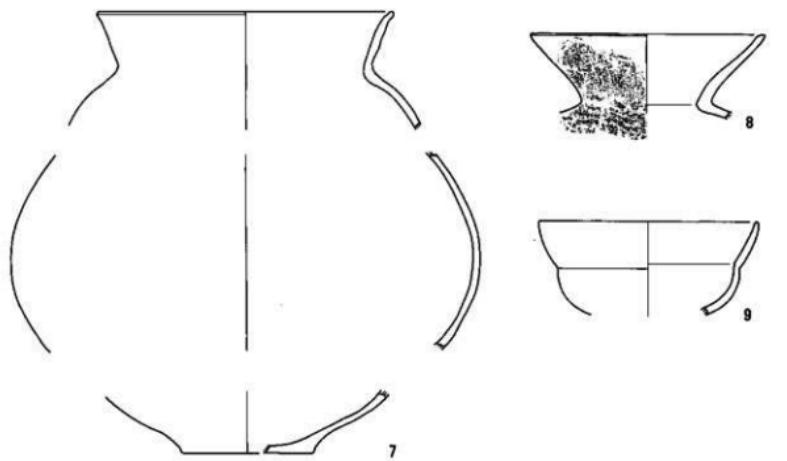
第8図7は壺形土器。口径13.8cm、底部径7.8cm、器高（推定）約24.0cm。口縁部から底部にかけては内外面とも摩滅により調整の痕跡は確認できない。8は壺型土器の口縁部で口径13.8cm。口縁部外面は縦方向の繊細な刷毛目が見られる。9は比較的口縁部の短い壺型土器。口径13.5cm、口縁部高3.8cm。



第6図 2号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図



第7図 2号住居跡出土遺物(1)



第8図 2号住居跡出土遺物(2)

0 (1/3) 10cm

3号住居跡 (SI-003)

3号住居跡（第9図）は本遺跡東端の緩やかな傾斜地に位置し、2号住居跡の南に隣接している。本住居跡の床面は東にやや傾斜しており、東の住居壁は自然消滅するかのように消失している。また、本住居跡の覆土は東と南に向かって徐々に浅くなる。

平面形 方形

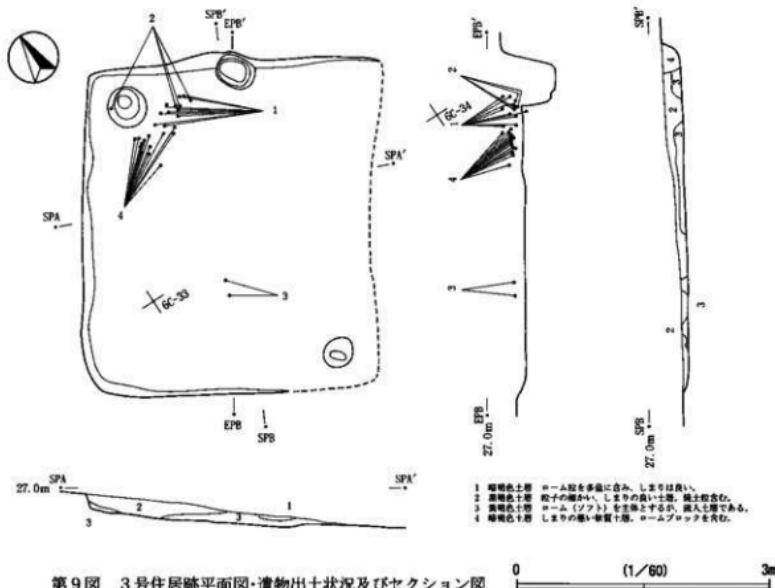
規模 長軸 4.1m

短軸 3.6m (推定範囲)

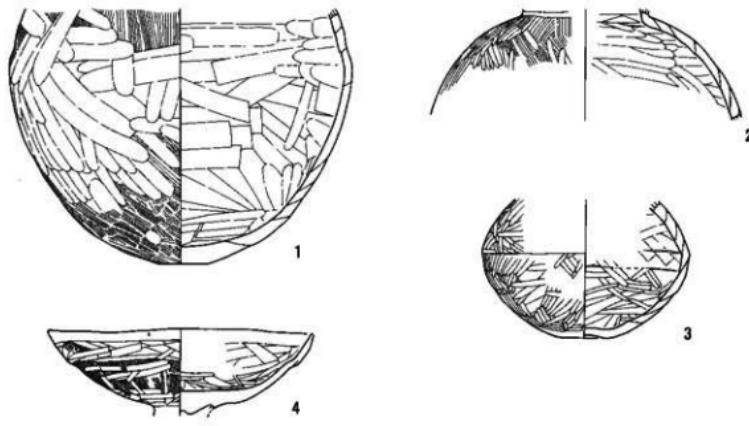
深さ 0.3m

付帯施設

炉は検出されていない。柱穴は北西と南東のコーナーにそれぞれ1か所ずつ計2か所が検出されている。また本住居跡北壁の中央に、壁に接する状態で土坑が検出された。規模は0.5m×0.4m×0.5m。この土坑からの出土遺物は検出されていない。



第9図 3号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図



第10図 3号住居跡出土遺物

出土遺物

3号住居跡の出土遺物は本住居跡北コーナー付近に集中している。遺物番号の1・2・4の各土器がこのコーナーの柱穴周辺から出土している。

第10図1は甕形土器の胴部。底部径2.8cm、胴部最大径20.2cmと極めて底部の小さな形状となっている。外面は胴上半部では縦方向の刷毛目、底部付近では斜方向の刷毛目が見られ、刷毛目の上からヘラ状工具によるなで調整が胴部中央を中心に認められる。内面はヘラ状工具による横方向のなで調整。2は壺型土器の胴上半部。外面は繊細な刷毛目の上からミガキが認められる。内面はヘラ状工具によるなで調整。3は小型壺型土器の胴部。最大径は12.2cm、底部径2.2cmで底部はやや産み気味である。外面は繊細なミガキが全面に認められ、内面は胴上半部はヘラ削りで胴下半部はヘラ削り後のミガキが認められる。また、胴部内外面には赤彩の痕跡も認められる。4は高杯の坏部。口径15.4cmで脚部を欠損している。口縁部内外面は横なで、坏部外面縦方向の繊細な刷毛目の上に横方向を主とするヘラ削り調整が見られる。内面は上半部はヘラ削り、下半部は細かなミガキの調整となっている。また、坏部内外面とも赤彩の痕跡が認められる。

4号住居跡（SI-004）

4号住居跡（第11図）は本遺跡東端の緩やかな傾斜地に位置し、2号住居跡の北にある。本住居跡西半分に多量の焼土が検出されている。

平面形 隅丸方形

規模	長軸	4.1m
	短軸	3.8m
	深さ	0.3m

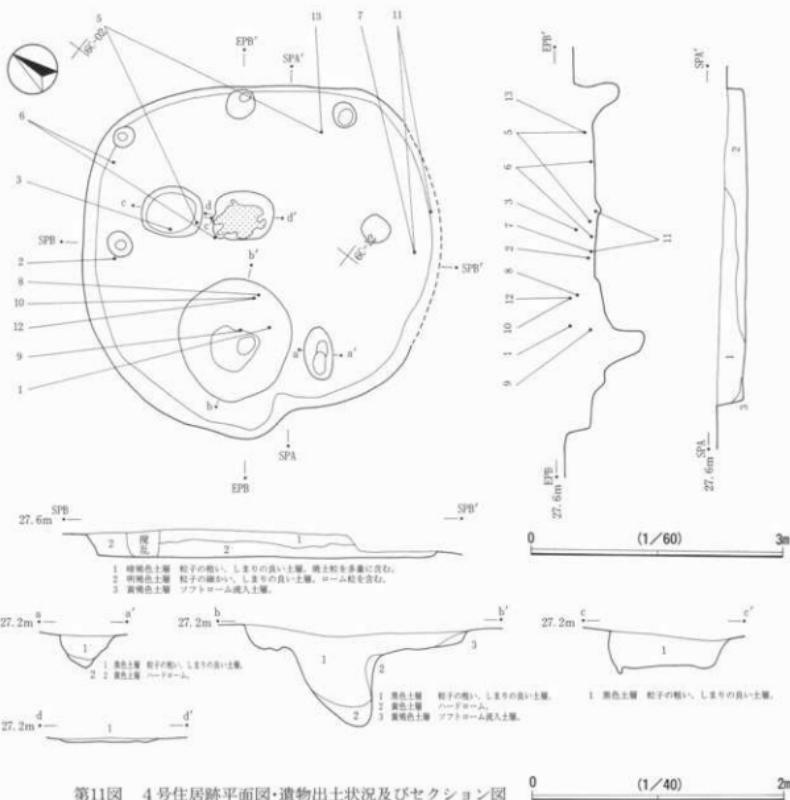
付帯施設

炉は本住居跡のほぼ中央にあり、規模は0.7m×0.55m×0.05m。炉跡に隣接して浅い土坑がある。規模は0.7m×0.6m×0.4mで底面は平坦面となっており、この土坑からの出土遺物は検出されていない。また、本住居跡の西縁部には平面円形の土抗状の掘込みがあり、規模は1.4m×1.4m×1.2m。土抗状掘込みの覆土断面の観察からは中央部分が深くなっている。柱穴の可能性もある。その他の柱穴は住居壁に沿って6本検出されている。

出土遺物

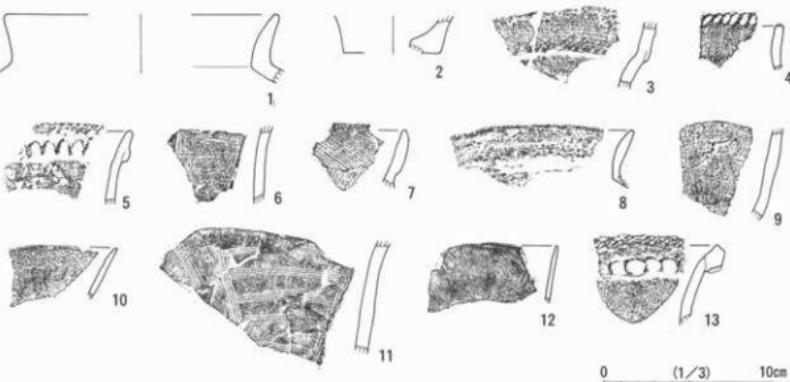
4号住居跡出土の遺物は比較的小さな土器片が中心で、そのうち2・5・6・7・9・11・13が床面に近い部分からの出土である。

第12図1は甕形土器の口縁部で、口径16.4cm（推定）。口縁部の立ち上がりはきわめて短く直立する。2は小型の甕形または鉢形土器の底部付近で底部径5.8cm。3は複合口縁で刷毛目を基調とし、折り返した口縁部分には押圧繩文が連続して刻まれている。4は口唇部に精円形の連続刻文があり、口縁部には縦方向の丁寧な刷毛目が認められる。5は複合口縁の口唇部に繩文を押圧し、折り返した端部を押圧して山形の連続押し込み痕が見られる。6は本住居跡に混入した縄文土器で胴部上半の器面に沈線による格子目文を配した前期黒浜式土器。7は器種は不明。口唇部には連続する刻文、口縁部付近はやや厚みのあるつくりで斜め左上がりの刷毛目、以下には口縁部と逆の右上がりの刷毛目が認められる。8は甕形土器の口縁



第11図 4号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図

0 (1/40) 2m

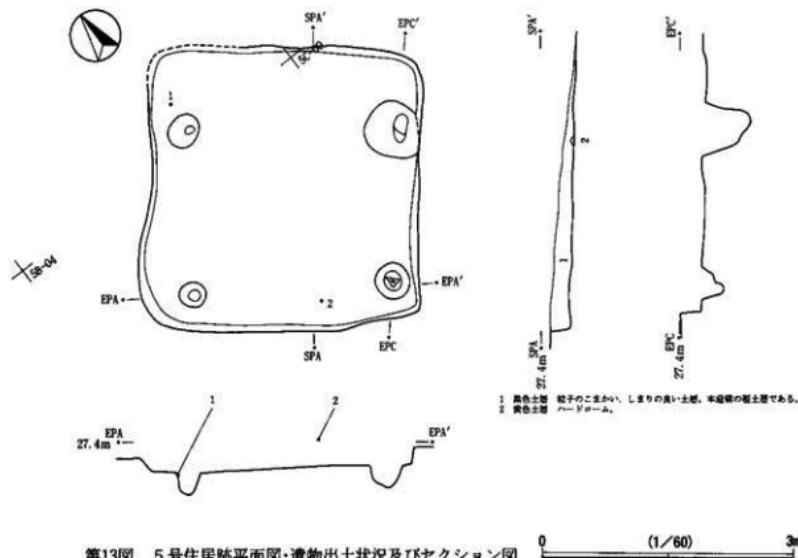


第12図 4号住居跡出土遺物

部で横方向の刷毛目が認められる。9は縦方向の刷毛目のある土器片で器種は不明。10は鉢形または壺形土器の口縁部で斜方向の刷毛目と直下に縦方向の刷毛目が認められる。11は6条の櫛歯を単位とする櫛描き並行沈線を特徴とする土器。縦位に走る櫛描き並行沈線による区画の間をやはり同様の並行櫛描き沈線を横位に配置した壺形土器の口縁部。12は鉢形または壺形土器の口縁部。外面は縦方向の刷毛目の上から丁寧なまで調整を行っている。13は本住居跡に混入した縄文土器で口唇部に縄文を連続施文した後期安行式土器。

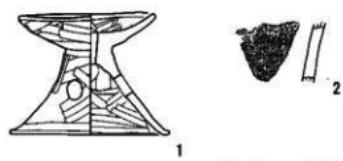
5号住居跡 (SI-005)

5号住居跡（第13図）は本遺跡本調査範囲の北端に位置し、本住居跡北半分の床面が貼り床状にやや高くなっている。覆土は住居跡の北東に向かって徐々に浅くなる。



第13図 5号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図

0 (1/60) 3m



第14図 5号住居跡出土遺物

0 (1/3) 10cm

平面形	方形
規模	長軸 3.3m
	短軸 3.2m
	深さ 0.3m

付帯施設

炉は検出されていない。柱穴は4か所のコーナー付近にそれぞれ1本ずつ計4本が検出されている。

出土遺物

5号住居跡出土の遺物はきわめて少なく2点であるが、そのうち第14図1はほぼ完形の器台である。口径7.8cm、脚裾部径9.3cm、器高7.0cmで脚部に3か所の透かし孔を有する。外面は受け部・脚部とも繊細なヘラ削り、内面は受け部にはミガキが見られ脚部は丁寧なヘラ削りとなっている。また、受け部の内面に赤彩の痕跡が認められる。胎土には長石・石英・スコリアを含む。2は6条の櫛歯を単位とする櫛描き波状沈線を特徴とする土器。

6号住居跡 (SI-006)

6号住居跡(第15図)は本遺跡の北東端に位置し、住居の約半分を古墳の周溝によって削り取られている。

覆土は多量のローム粒を含み、東に向かって徐々に浅くなる。

規模	長軸 3.7m
	短軸 2.4m
	深さ 0.3m

付帯施設

6号住居跡は検出された部分が半分ほどであるため本住居跡の全容は明らかでないが、遺存部分の北西壁寄りにやや大きめの土坑が検出され、規模は0.96m×0.9m×0.84m。本住居跡の南壁に沿って2本の柱穴があり土坑と南壁のほぼ中間位置にも柱穴が1本検出された。

出土遺物

住居跡の遺存部分全体に分布するが、土坑から甕形土器の口縁部が出土している。第16図1は土坑出土の甕形土器で口径18.3cm。胴部外面に刷毛目が認められ、口縁部内外面は横で調整。

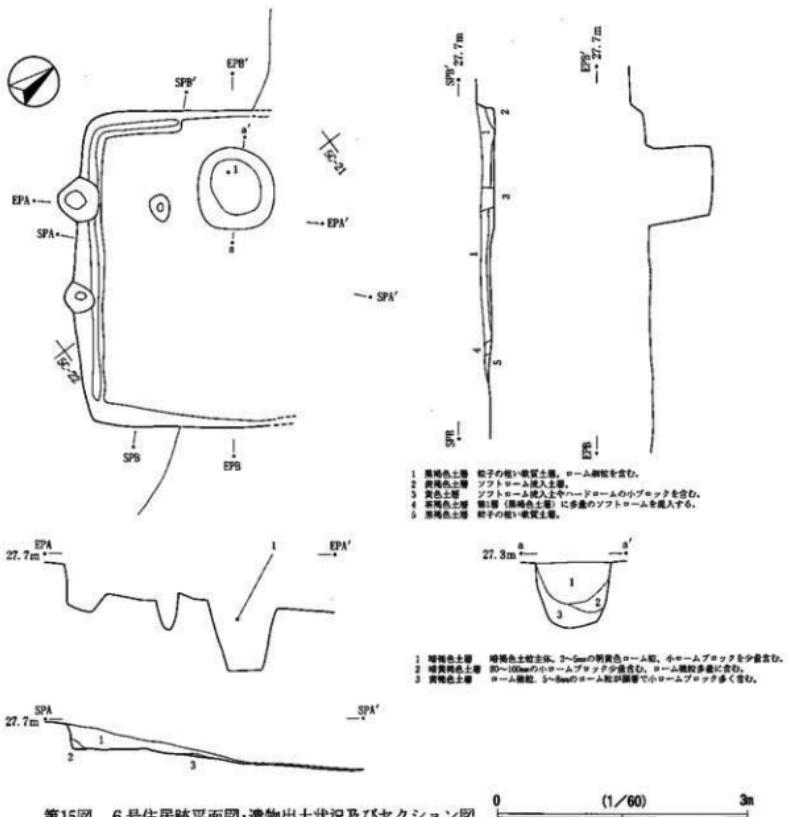
7号住居跡 (SI-007)

7号住居跡(第17図)は本調査範囲のほぼ中央に位置し、西壁及び南壁の上部と付近の覆土の一部を方形周溝状造構によって削平されている。

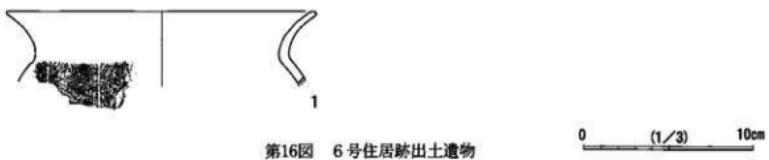
平面形	隅丸方形
規模	長軸 3.2m
	短軸 2.9m
	深さ 0.4m

付帯施設

7号住居跡は東壁から南壁にかけて床面に溝状の掘り込みがあり、その中に柱穴が3本配されている。



第15図 6号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図



第16図 6号住居跡出土遺物

また、西壁寄りの床面には溝を伴わない柱穴が1本検出されている。また、東コーナーには土坑がありその規模は0.90m×0.84m×0.32m。土坑の底は平坦面となっており、この土坑からの遺物は検出されていない。

出土遺物

7号住居跡出土の遺物は床面の溝状の掘り込み付近を中心に出土しており、遺物番号の1・3・4の各土器片が比較的床面に近いところから検出されている。第18図1は壺形土器の口縁部。口径12.4cmで外面には縦方向の刷毛目と口唇部に並行して周回する1条のなで調整が見られる。胎土には石英・スコリアを含む。2は高壺の脚部。外面は縦方向のヘラ削り。胎土に砂粒・石英・スコリアを含む。3・5は同一個体の壺形土器の口縁部と考えられる。いずれも7条の櫛歯を単位とする櫛描き波状沈線を特徴とする土器。3は縦位に走る櫛描き並行沈線による区画と横位に配置した並行櫛描き沈線が見られ、5は口唇部付近の折り返しが見られ、口縁部には横位の波状沈線が認められる。4は壺形土器の底部で底部径は10.4cm。RL繩文が丁寧に施文されており、底部には網代の縦糸と横糸の編み目痕が鮮明に残されている。6は口唇部に連続する刻文を有する壺形土器の口縁部。縦方向の櫛描き波状沈線が見られる。7は壺形土器の口縁部。外面は縦方向の、内面は横方向のそれぞれ刷毛目が認められる。

8号住居跡 (SI-008)

8号住居跡(第19図)は本調査範囲のほぼ中央に位置し、古墳の墳丘下から検出されており、遺存状態は良好である。覆土も安定しており、墳丘構築時の攪乱等は見受けられない。

平面形 隅丸方形

規模 長軸 4.8m

短軸 3.9m

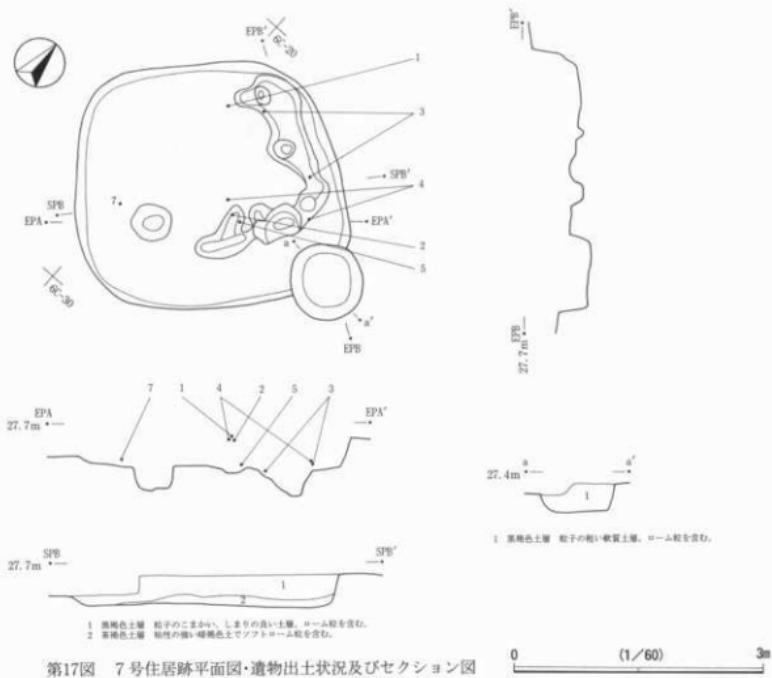
深さ 0.4m

付帯施設

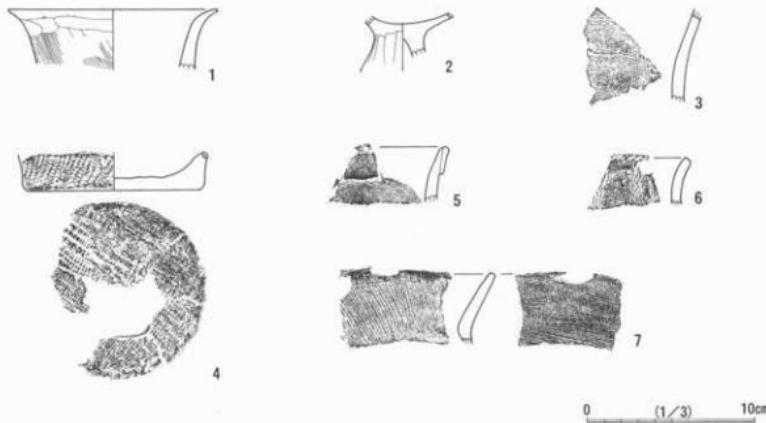
8号住居跡は住居の中央やや北寄りの位置に炉跡が検出された。規模は1.00m×0.90m×0.18m。南壁中央付近に土坑状の掘り込みがあり、規模は1.10m×0.35m×0.28m。また、本住居跡の炉跡西側にはその規模1.50m×0.80m×0.38mの溝状の掘り込みがある。柱穴は床面には3本、壁面に接して3本の計6本が検出されており、そのうち3本の柱穴は本住居跡の長軸上に一直線に並ぶ。

出土遺物

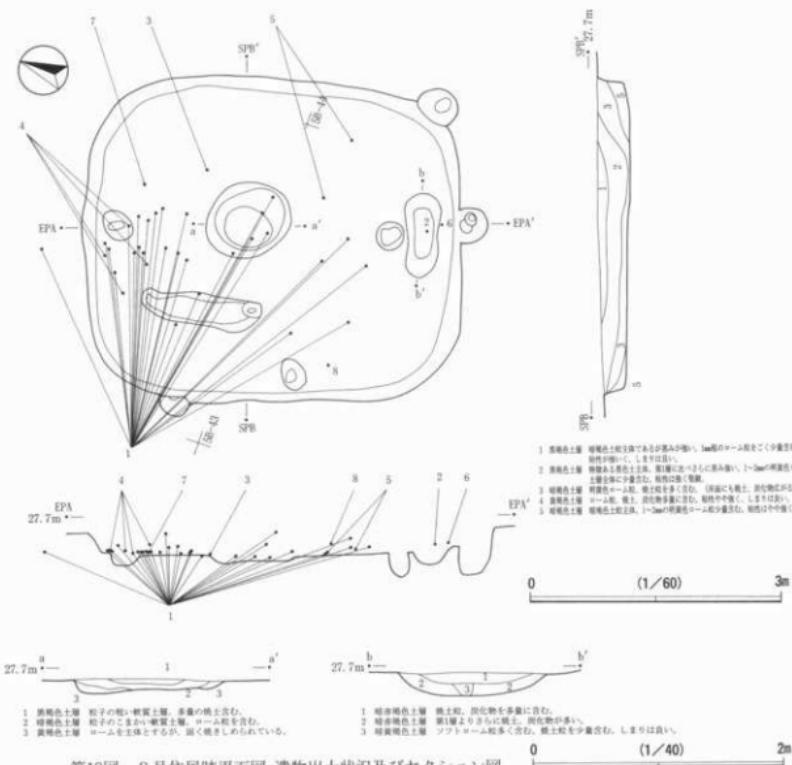
8号住居跡の出土遺物の多くが本住居の長軸沿いの床面直上に検出されており、特に第20図1はこの住居跡の時期を決定するものとなっている。1は口径14.5cm、胴部最大径16.5cmの壺形土器で、口唇部には丁寧なLR繩文の施文が見られる。上半部には細かな刷毛目調整を行った後に3条の櫛歯による並行沈線を縦に7か所配置し、6分割した空間に同様の横方向の並行沈線を5条配置している。この横方向の並行沈線は隣接する区画の並行沈線とは連続性が無いものや縦方向の並行沈線の中途から始まるものなど、意匠的にはちぐはぐな文様構成となっている。下半部は口唇部と同様のLR繩文を全面に配置する。内面は上半部を中心に斜方向の刷毛目が認められる。胎土には砂粒・石英を含み、内外面とも黄褐色の色調となっている。2は壺形土器の口縁部で、口唇部には押圧波状口縁が見られる。口唇部直下には横方向の刷毛目、以下には櫛歯による波状並行沈線が認められる。3は壺形土器の底部付近。底部径は14.5cmで底部には疑



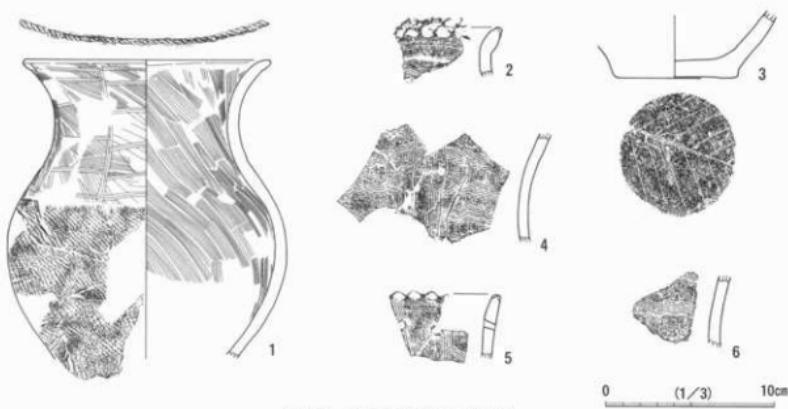
第17図 7号住居跡平面図・遺物出土状況及びセクション図



第18図 7号住居跡出土遺物



第19図 8号住跡平面図・遺物出土状況及びセクション図



第20図 8号住跡出土遺物(1)



第21図 8号住居跡出土遺物(2)

似木葉痕が見られる。この木葉痕は本物の葉脈の転写ではなく、ヘラ状工具の先端で刻んだものである。4は7条の櫛歯を単位とする波状並行沈線が縦に2条見られ、これは口縁部の文様構成の縦区画を成すものと考えられる。また、2条の縦方向の波状並行沈線を挟み、横方向の波状並行沈線が並行に配置されている。5は甕形土器の口縁部で口唇部は押圧波状口縁となっている。6条の櫛歯を単位とする並行沈線が縦方向に2条見られ、縦区画された部分には横方向の波状並行沈線が認められる。また、口縁に並行して小孔が施されている。6は7条の櫛歯を単位とする波状並行沈線が横方向に2条並行して見られ、4と同一個体と考えられる。

第21図7は土製の紡錘車で直径4.7cm、厚さは縁部で1.8cm、中心付近で1.3cm。紡錘車の正面には複数の沈線を一単位として中心から放射状に6セット配置し扇状の区画を作り出し、この区画内にはランダムな刺突文を充填している。側面にもランダムな刺突文を充填するが、一か所のみ意図的に小さく繊細な刺突具に変更した部分が認められる。8は砂岩製の砥石で、形状はばち状できわめて平坦な様相である。欠損のため全体の大きさは不明であるが、厚みは遺存部分全体にほぼ1.0cmを保っている。

9号住居跡

9号住居跡（第22図）は本調査範囲のほぼ中央に位置し、古墳の墳丘下から検出された。8号住居跡に近接した位置にあるが、調査時は掘立柱遺構と考えられていたが、その後の検討の結果、住居跡が削平されたものであることが判明した。周辺には柱穴状の穴が数か所検出されているが、穴相互の位置関係や距離を考慮すると推定4.0m～6.0m前後の住居跡と考えられる。

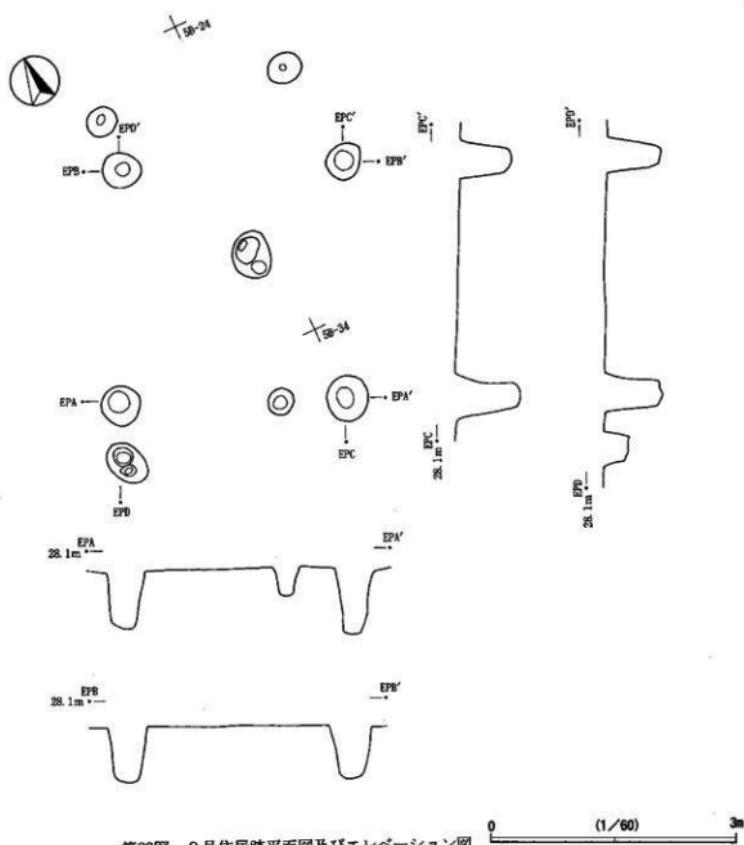
平面形 不明

規模 不明

付帯施設

炉跡は検出されていない。柱穴は主柱穴に相当するものが4本、補助的なものが4本の計8本である。
出土遺物

9号住居跡は壁面が全く存在しないため、本住居に伴うと判断できる遺物はない。



第22図 9号住居跡平面図及びエレベーション図

0 (1/60) 20.1m

第2節 その他の遺構と遺物

円形周溝状遺構

円形周溝状遺構（第23図）は本調査範囲の東端に位置し、およそ半分が境界外のため規模は不明。周溝の幅は最も広いところで1.25m、深さ0.24mである。また、周溝内に土坑状の掘り込みが検出されており、規模は長軸2.78m、短軸1.55m、深さ0.45m。周溝に掘り込まれた土坑内からの出土遺物は無いが、覆土や掘り方の観察から土坑墓と考えられる。

方形周溝状遺構

方形周溝状遺構（第24図）は7号住居跡と接する位置にあり、調査時には古墳周溝の一部とも考えられたが、その後周溝の深さや周溝底部の検討結果から方形周溝状の遺構である可能性が高まった。周溝は全周することなく断ち切れるため、規模については不明であるが、遺存部分での計測値は幅2.10m深さ0.34mである。7号住居跡と一部重複しているが、周溝確認面では7号住居跡の輪郭は確認されておらず、周溝の底は7号住居跡の覆土中で止まっていることから住居廃絶後に周溝が掘り込まれたと考えられる。

土坑墓

土坑墓（第25図）は7号住居跡の東に近接して位置し、規模は2.85m×1.70m×0.90m。確認面での形状は長方形で全体に一段掘り窪め、さらに中央部分を深く掘り下げた形態である。

出土遺物

第25図1は高壙の脚部で脚部径は10.0cm。壙部は欠損している。本遺構の出土遺物はその多くが小破片のため復元・実測できないものの総数38点が検出されており、それらの遺物は主に墓坑中央埋葬部の両側の段上の覆土から検出されており、埋葬後の供獻を目的とした遺物群であることが考えられる。

1号溝状遺構

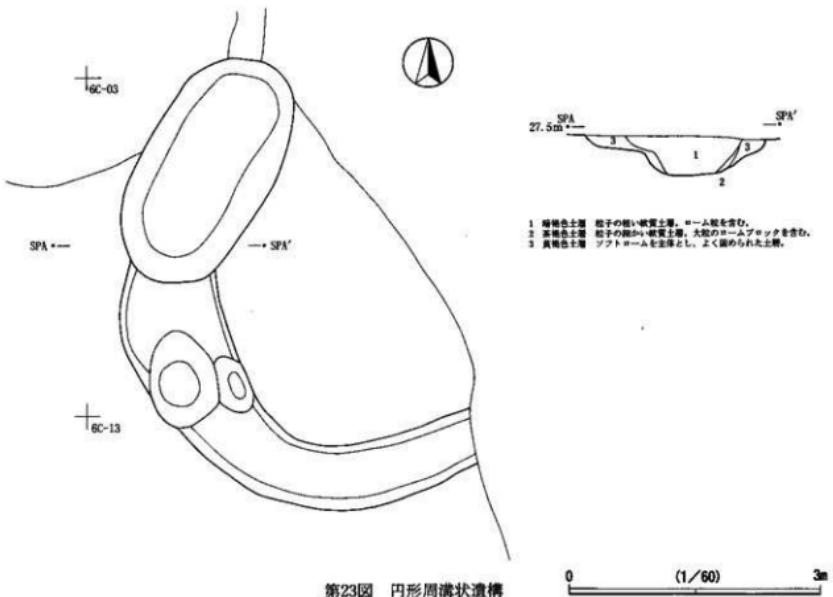
1号溝状遺構（第26図）は本調査範囲の北端に位置し、古墳周溝の内側を起点として北東方向に直線状に延び、古墳周溝から先は検出されていない。溝の長さ12m、幅は1.8m、深さ0.4m。溝の底には柵列の基礎坑と考えられる痕跡が連続して検出されたが、比較的間隔を開けたものである。なお、本来は古墳周溝内の覆土上面においても溝の痕跡は有ったものと考えられるが調査時点では検出できなかった。

2号溝状遺構

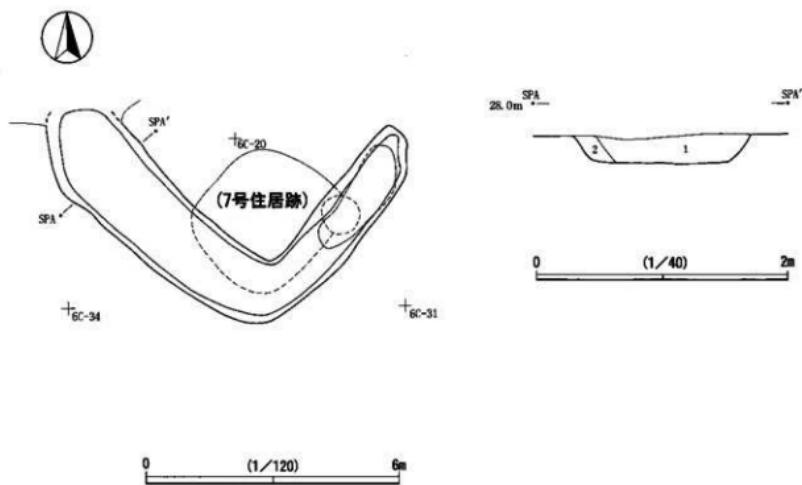
2号溝状遺構（第27図）は本調査範囲の中央部北西端から東南方向に直線状に延び、南斜面部で最も深くなり急峻な斜面を下り本調査域外へと続く。溝の長さ22m、幅は1.2m～2.7m、深さ0.6m～1.6m。台地平坦部では緩やかな逆台形の断面も南斜面部では「V」字状となり、溝の底には柵列の基礎坑と考えられる痕跡が密に連続して検出された。

出土遺物

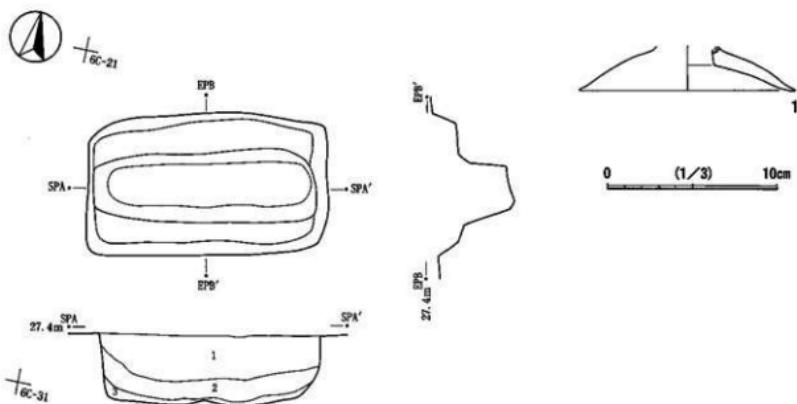
2号溝状遺構の出土遺物は第27図1の土師器の高壙と砂岩製の板状石碑の破片のみである。高壙は壙部を欠損しており、全体に摩滅が進んでおり時期は特定できない。板状石碑は墓石または塔婆の可能性がある。



第23図 円形周溝状遺構



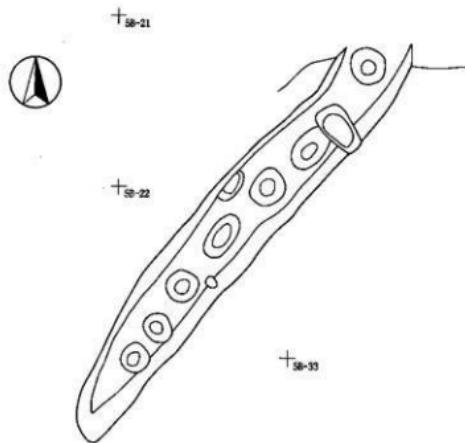
第24図 方形周溝状遺構



- 1 黒褐色土層 粒子の細かいしまりの多い土層。無土粒を含む。
2 寸光色土層 粒子の大きい砂質土層。ローム灰を多量に含む。
3 黄褐色土層 フットコーム等の特殊な構造を有する。

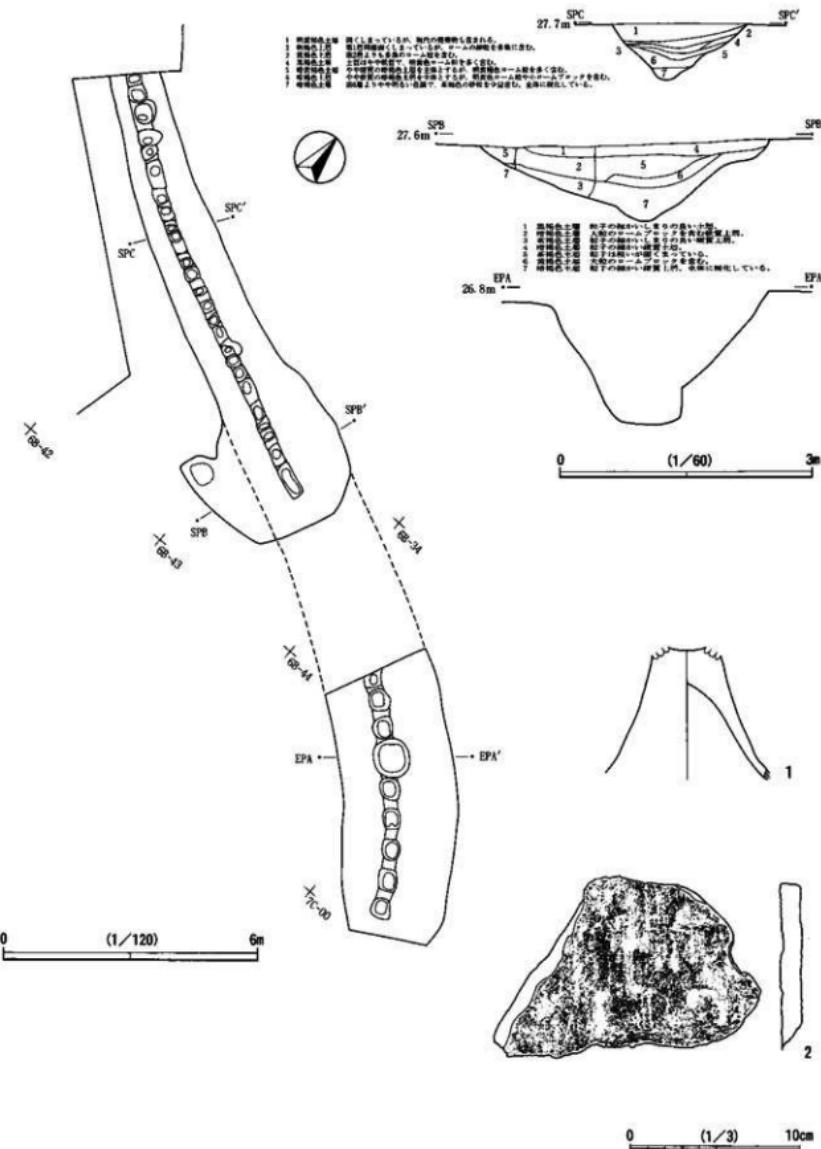
0 (1/60) 3m

第25図 土坑墓及び出土遺物



0 (1/120) 6m

第26図 1号溝状遺構



第27図 2号溝状造構及び出土遺物

方形溝状区画

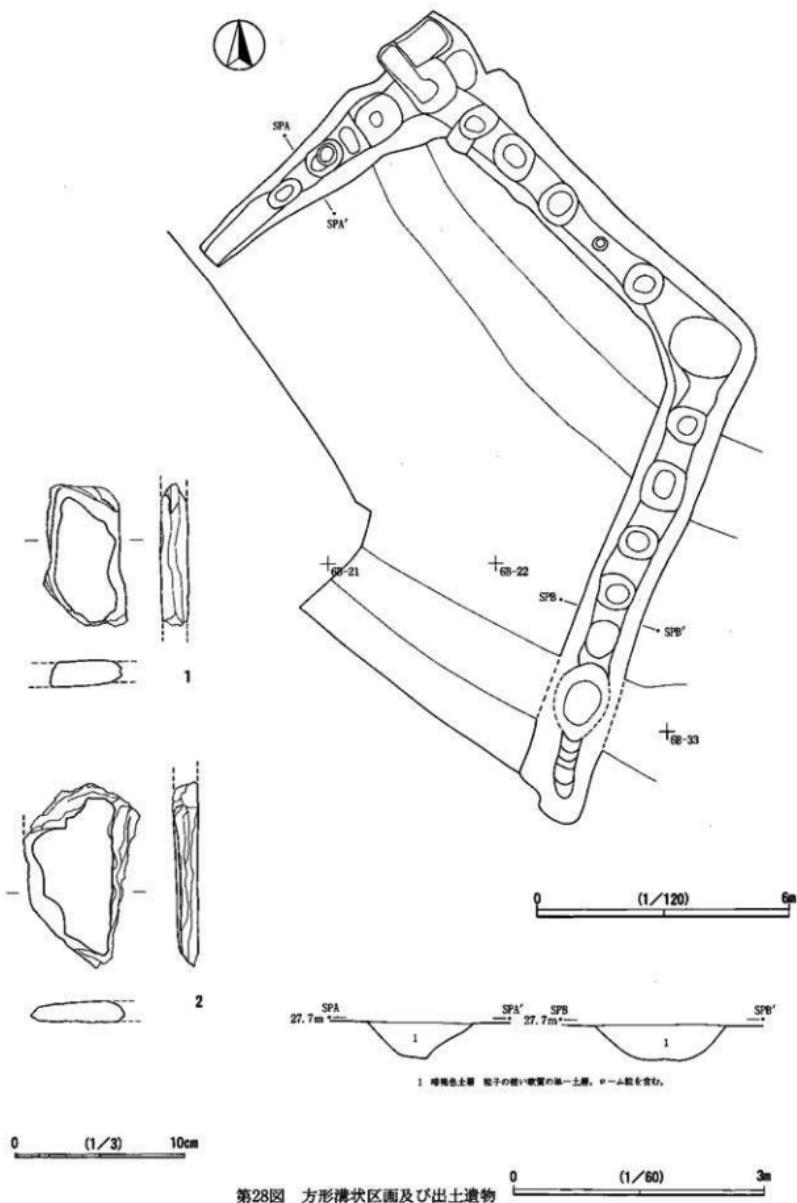
方形溝状区画（第28図）は本調査範囲の中央部西端に位置し、「コ」の字状に走る。断面は逆台形状で溝の底には柵列の基礎坑と考えられる痕跡が検出された。検出された溝状遺構の総延長は21m（5.0m×9.0m×7.0m），幅は0.7m～1.7m，深さ0.4m～0.8m。本遺構は2号溝状遺構を横断するが、2号溝状遺構によって切断されており、2号溝状遺構よりも先行して掘り込まれたことがわかる。溝の両端は西側の畑に延びており全容は明らかではないが、溝によって囲まれた区画内はきわめて平坦で構築物の痕跡は検出されていない。

出土遺物

溝状方形区画遺構の出土遺物は第28図1・2の綠泥変岩製の板碑の残欠のみである。遺存部分が僅かであるため全容は不明。厚さは1.3cm～1.6cm。1は基部よりも上の部分で、2は基部に近い部分と考えられる。

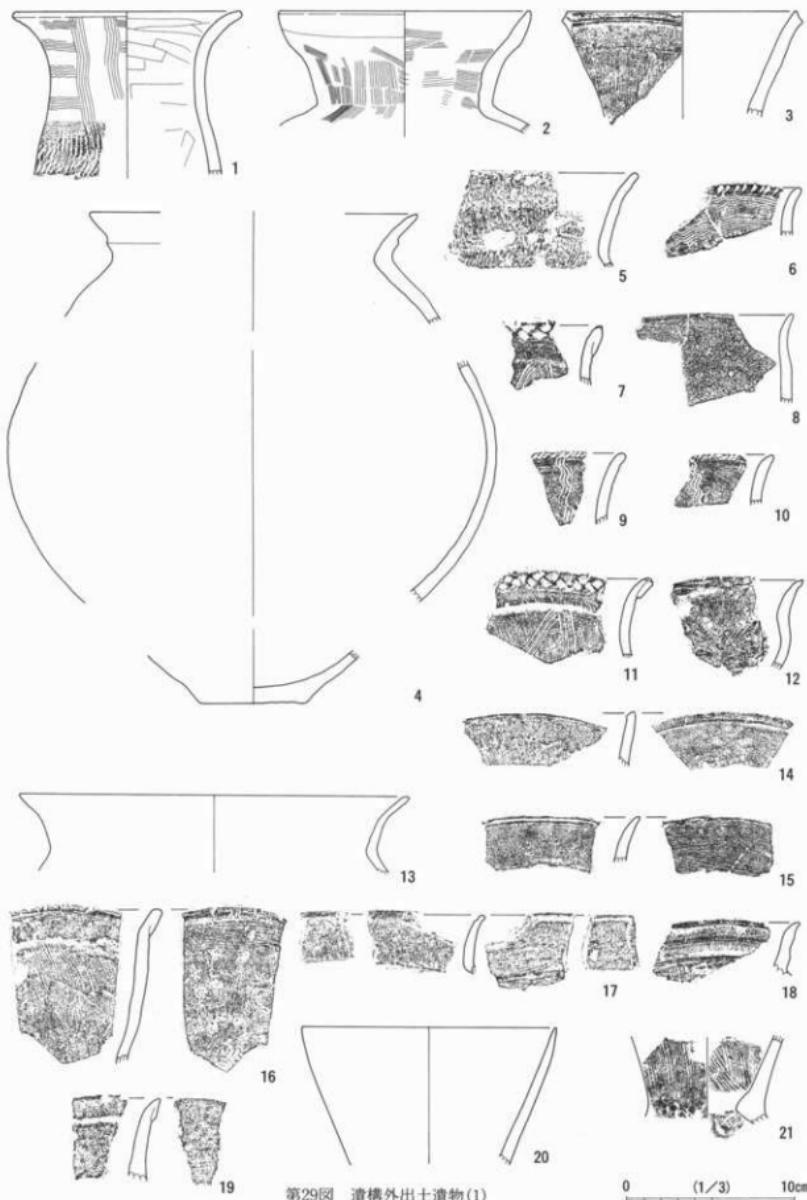
遺構外出土遺物

第29図1は壺形土器の口縁部。口径13.6cmで口唇部付近が大きく外反する。5条の櫛歯を単位とする波状並行沈線が縦に2条見られ、これは口縁部の文様構成の縦区画を成すものと考えられる。また、2条の縦方向の波状並行沈線を挟み横方向の波状並行沈線が5条並行に配置されている。口縁部の櫛描沈線による文様帯とその直下の胴部にはR.L綱文が充填されており、弥生時代後期久ヶ原期から前野町期にかけて印旛沼周辺地域に顕著な存在を示す北関東系と言われる土器の範疇に入るものと考えられる。2は壺形土器の口縁部で、口縁部径15.0cm。口縁部外面には縦方向の刷毛目を基本とし、やや外に膨らんだ口唇部付近で斜方向の刷毛目が認められる。口縁部内面には横方向の刷毛目が施されている。3は壺形土器の口縁部で、口縁部径13.6cm。口縁部外面には縦方向の纖細な刷毛目が認められる。4は壺形土器。規模はすべて推定であるが口径19.6cm、胴部最大径29.0cm。全体に摩滅が著しく器面調整は不明であるが、口縁部に逆「く」の字状の小屈曲が見られることから古墳時代前中期の時期に該当する。5は壺形土器の口縁部。外面には縦方向の丁寧な刷毛目が認められる。6は壺形土器の口縁部。口唇部には連続する刻文を有し、外面には波状櫛描き沈線が横方向に施されている。7は壺形土器の口縁部。口縁部はわずかに折り返しの見られる複合口縁で、口唇部に押圧痕のある波状口縁となっている。外面には縦方向の刷毛目調整の後に櫛状工具により縦及び斜方向の並行沈線が施されている。8は壺形土器の口縁部で口唇部付近には横方向の刷毛目が認められる。9・10は同一個体の壺形土器の口縁部。口唇部には連続する刻文を有し、4条の櫛歯を単位とする縦方向の櫛描き波状並行沈線が施されている。11は口唇部に押圧波状口縁を有する壺形土器の口縁部。7とよく似ているが口唇部の折り返し部分がやや太く段を成しており別個体と考えられる。12は小型壺形土器の口縁部。口縁部及び胴部外面は横方向の刷毛目が認められる。13は壺形土器の口縁部。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整が認められる。14は壺形土器の口縁部。口縁部径23.0cmで口縁部直下に僅かながら縦方向の刷毛目の痕跡がうかがわれる。15は壺形土器の口縁部。外面は縦方向の、内面は横方向のそれぞれ刷毛目が認められる。16は小さめの折り返しが特徴の複合口縁を有する壺形土器の口縁部。折り返し部は指頭で押圧したものと考えられるが、端部は不揃いで雰囲気を与えている。外面は縦方向の丁寧な刷毛目、内面は粗い横方向の刷毛目が特徴となっている。17は壺形土器の口縁部。外面は縦方向の纖細な刷毛目、内面は横方向の丁寧な刷毛目となっている。18は壺形土器の口縁部。口唇

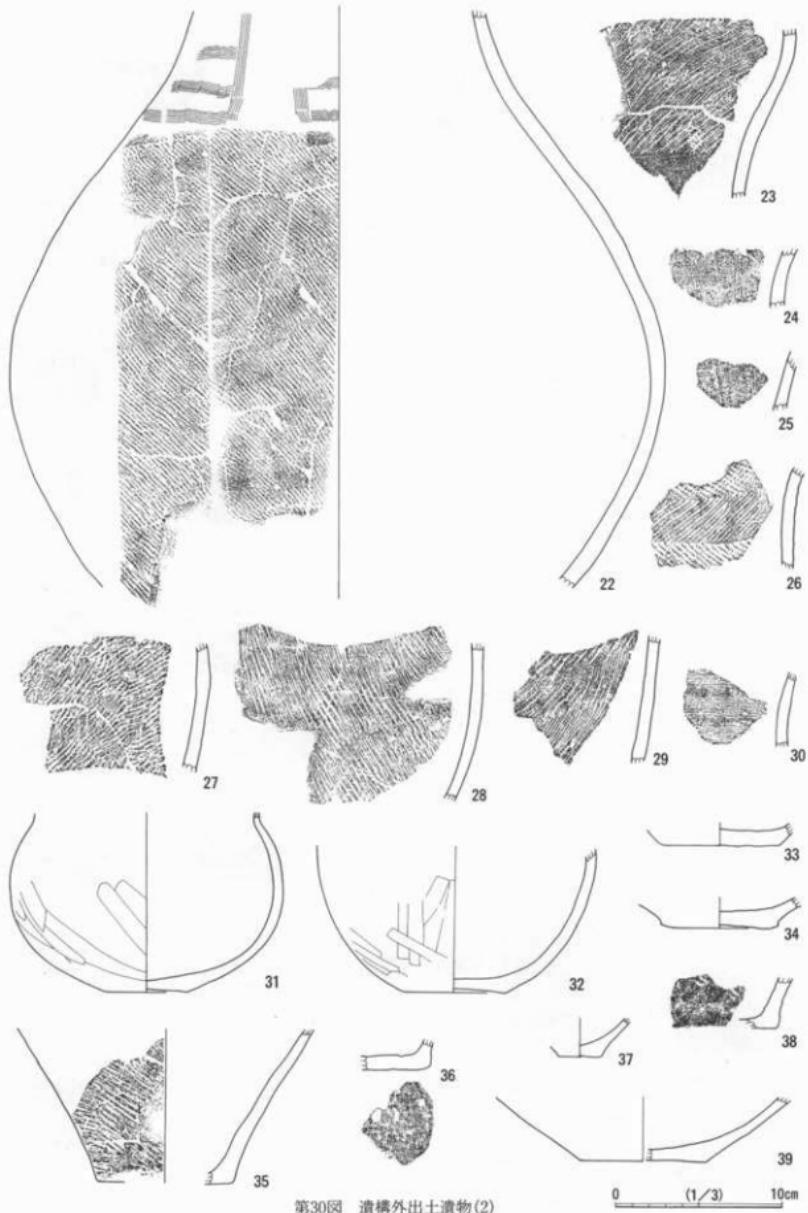


第28図 方形溝状区画及び出土遺物

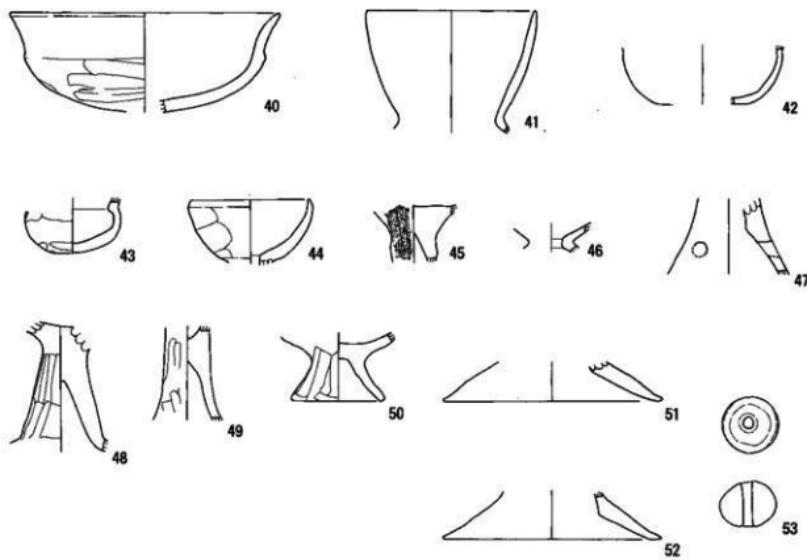
部は断面がやや丸みを帯びた膨らみを持ち、直下には縦方向の刷毛目が認められる。19は壺形土器の口縁部で、小さな折り返しを有する複合口縁となっている。外面折り返しの端部は段を成しており、直下には縦方向の刷毛目が認められる。内面は横方向の刷毛目となっている。20は壺形土器の口縁部。口縁部径15.1cmで内外面に赤彩の痕跡が残る。器面は摩滅が著しく調整の痕跡は確認できない。21は壺形土器の口縁部。外面は縦方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛目が特徴となっている。また、砂粒を多く含むため器面は全体にざらついている。第30図22は壺形土器の口頸部及び胴部。口頸部は縦方向の櫛描き並行沈線を2条施し、縦区画の中を同様の櫛描き波状並行沈線を複数条並行して配置している。胴部はLR縄文を全面に充填しおり、第29図1と同時期のものと考えられるが、胴部の縄文が第29図1がRL、第30図22がSLとなってしまおり細部では意匠を異にしている。23は壺形土器の胴部。外面にはRL縄文を丁寧に施している。24・25は器面を刷毛目調整した後、櫛歯による縦方向の並行沈線と横方向の波状並行沈線が施されている。佐倉市大崎台遺跡7号方形周溝墓出土に類似のものが出土している。26はRL・LR・RLの縄文による3段の羽状縄文が丁寧に施された壺形土器の胴部破片。27は不規則なRL縄文を施した壺形土器の胴部破片。28は22と同様にLR縄文を丁寧に施した壺形土器の胴部破片。29は23と同様の丁寧なRL縄文の壺形土器の胴部破片。30は24・25と同様の壺形土器の口縁部破片で、6条の櫛歯を単位とする波状並行沈線が複数条横方向に並行に配置されている。31は小型壺形土器の胴部で口縁部を欠損する。球胴状の胴部の最大径は16.1cmで、外面は斜方向のヘラ削りによる器面調整と赤彩の痕跡が見られる。32は小型壺形土器の胴下半部。胴部最大径は16.5cmで、31よりもやや長胴で外面はヘラ削り調整となっている。33・34は壺形土器の底部。35は壺形または鉢形土器の底部付近。LR縄文を底部付近まで全面に施した後期後半のいわゆる北関東系と呼称される土器で、胎土は密で焼成も堅緻である。36は底部に繊細な網代痕を有する。37はミニチュア土器の底部。38は丁寧な刷毛目が底部付近まで施されている。39は球胴状の胴部が推定される壺形または壺形土器の底部。第31図40は土師器の高杯。口縁部径16.0cm、器高6.0cmで口縁部は緩やかに外反し、口縁部以下とは稜線で区切られている。口縁部外面は横なので、口縁部以下は横方向のヘラ削り。41は壺形土器の口縁部で口縁部径10.0cm。全体に黒褐色で胎土に多量の砂粒を含んでいる。外面はヘラ削り、内面は丁寧な調整。42・43は壺形土器の胴部。42は球胴に近い形状と考えられるが、43は胴部の小さな形状で41と似た色調と胎土を有するが、口縁部との接合部分のサイズが異なっており別個体の土器である。44は器台で脚部を欠損する。口縁部径は9.0cmで、内面に赤彩の痕跡ある。45は小型高杯の椀部と脚部接合部で外面には繊細な刷毛目が認められる。46は器台の受部と脚部の接合部で、外面に赤彩が認められる。47は器台の脚部で3か所に円形の透かし孔がある。48・49・50は高杯の脚部で、いずれも外面はヘラ削り調整。51・52は高杯の脚裾部。51の脚裾部径は13.2cm、52の脚裾部径は13.0cm。53は土製土玉で平面径3.4cm、側面高2.7cm、色調は明褐色で焼成時の黒斑が残る。胎土には石英・雲母・スコリアを含み、焼成は良好で表面を丁寧ななで調整によって整えている。



第29図 遺構外出土遺物(1)



第30図 遺構外出土遺物(2)



第31図 遺構外出土遺物(3)

0 (1/3) 10cm

第3章 まとめ

岩名町前遺跡は当初塚1基と包蔵地の調査の予定であったが、調査開始後に塚は古墳であることが判明した。また、包蔵地内から出土する遺物が弥生時代の特徴を持つ土器片が顕著であったことから、検出された住居跡の時期は弥生時代に相当するものと考えられた。調査の結果、4号住居跡・5号住居跡・7号住居跡・8号住居跡については伴出する土器から弥生時代のものとされるが、1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡については古墳時代前期五領期の住居跡である。6号住居跡については古墳の周溝に切られしており、古墳築造前の時期であることは推測できるが伴出する遺物からは弥生時代の住居跡とも考えられない。本遺跡の本調査域内の遺物包含層からも多数の弥生土器片が出土しており、特に4号住居跡・5号住居跡・7号住居跡・8号住居跡出土の土器と関連するものが見られる。それらの住居跡出土の遺物は弥生時代後期の範囲には該当するものの、さらに詳細な時期を特定する資料は確認されていないが、遺構外出土の資料の中の第29図1及び第30図22の土器は、口縁部から口頭部にかけて櫛状工具による櫛描並行沈線の組み合わせを空間分割の基本とし、胴部を繩文で全面覆い尽くす特徴を有する。4号住居跡・5号住居跡・8号住居跡出土の遺物は遺構外出土の上記の土器と同じ系統に属するものと考えられる。ただし、8号住居跡出土の第20図1は口唇部の繩文施文と口縁部から口頭部にかけての櫛描並行沈線のうち、横方向の並行沈線は波状ではなく単なる並行沈線となっており文様意匠の省略化を感じられる。

後期土器の口頭部文様帶における空間分割に使用された櫛描並行沈線については、その系譜について二つの可能性が考えられる。一つは櫛描文を多用する東海系の弥生土器に影響を受けた中期宮ノ台期の伝統を引き継いだ意匠と見るもの。もう一つは櫛描文土器の関東地方への波及ルートの内、北関東の各地を経由して北緯地域に移入された意匠と見るものである。

後者のルートは現在の群馬県方面を経由して南関東の各地に広がったものと考えられている。群馬県の櫛描式土器に見られる櫛描並行沈線による文様意匠は口頭部に展開されたものであるが、栃木県方面の二軒屋式土器では口頭部の櫛描並行沈線文のほか胴部には羽状の撚糸文や付加条文が加えられる。また、茨城県方面では後期前半の長岡式土器では複合口縁とその部分に施された繩文と口頭部の櫛描並行沈線を特徴とし、後期後半の十王台式土器では口頭部を中心に縦区画の櫛描並行沈線を3から4単位に分割し、その区画内を横方向の櫛描波状沈線で充填している。

改めて岩名町前遺跡の弥生土器を観察すると、胴部に繩文や撚糸文を充填し、口唇部にも繩文を施す技法を行い、北関東系といわれる後期弥生土器に見られる櫛描並行沈線文を使用した口頭部の特徴を有している一連の土器が検出されている。また、前述の4軒の弥生時代の住居跡はいずれも一辺が3m～4mと比較的小規模のものである。印旛沼周辺地域の弥生時代後期久ヶ原期の住居跡は規模も比較的大きなもののが主流であるが、弥生町期から前野町期にかけては住居跡の規模が小さくなるとされている。こうした状況を総合的に観察した場合、岩名町前遺跡は、出土土器が弥生時代前野町並行期から古墳時代五領期にかけての変遷が見られることから、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての集落として把握される。

房総半島における弥生土器の様相については先述によりさまざまな検討が加えられてきた。中でも東海系の弥生土器の影響を強く引き継ぐ南関東系の土器と東海系の土器が北関東方面でさまざまな地方色を附加した後もたらされた北関東系の土器の浸透度の差が、印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡ごとの微妙な変化

として現れているものと考えられる。

岩名町前遺跡において観察された弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての状況を踏まえ、印旛沼周辺地域の主な遺跡の事例を参照しつつ比較検討したい。

印旛沼周辺の弥生時代の遺跡は、印旛沼に連なる鹿島川・手縫川及び新川の流域を中心に展開している（第1表印旛沼周辺地域の主な弥生時代遺跡及び第32図印旛沼周辺地域の主な弥生時代遺跡分布図参照）。

鹿島川河口左岸の台地上には佐倉市江原台遺跡（8）、鹿島川を5km程上流に遡った高崎川との分岐付近から南に広がる台地には大崎台遺跡（4）・寺崎向原遺跡（14）・寺崎一本松遺跡（15）・六崎貴船台遺跡（5）が所在する。

江原台遺跡は弥生時代から歴史時代まで集落は継続して営まれており、その内弥生時代後期の住居跡は65軒が検出され、北関東系の土器を主体としている。古墳時代になると一転して東海系の土器群が主体となる。大崎台遺跡A地点では弥生時代中期宮ノ台期の方形周溝墓（1基）や後期前野町期の住居跡10軒、B地点では中期宮ノ台期の住居跡35軒、後期前野町期及び北関東系土器の移入期の住居跡53軒、C地点では後期北関東系土器の移入期の方形周溝墓群（11基）が検出されている。

大崎台遺跡西側の対岸の台地上には寺崎向原遺跡があり、弥生時代中期宮ノ台期の方形周溝墓群（43基）が確認されている。寺崎一本松遺跡は弥生時代中期宮ノ台期の住居跡及び方形周溝墓が検出されており、六崎貴船台遺跡は大崎台遺跡群と同じ台地の東端に位置し弥生時代中期宮ノ台期の集落跡が検出された。

鹿島川流域の弥生時代の遺跡では中期宮ノ台期の集落やその後に主流となる後期の北関東系土器を特徴とする集落が展開する地域であることがわかる。

手縫川流域の弥生時代の遺跡は中流域の左岸に飯郷作遺跡（22）、白井南遺跡群（18・21）、上座矢橋遺跡（19）、上流域では御山遺跡（31）、池花南遺跡（33）などが所在する。飯郷作遺跡は昭和51年～52年にかけて（財）千葉県文化財センターにより調査され、北関東系の土器を主体とする弥生時代後期の住居跡（41基）や古墳時代前期の住居跡（46軒）、方墳および前方後方墳が検出されている。弥生時代の住居跡は久ヶ原期から弥生町期に相当する時期であるが、器面に附加条繩文を配する壺形土器が主体となっており北関東系の土器の特徴を備えている。

白井南遺跡群では飯郷作遺跡とはやや異なる様相が見られ、渡戸A遺跡では方形周溝墓（1基）、渡戸B遺跡では弥生時代後期前野町期相当の住居跡（15軒）と方形周溝墓（2基）、石神Ⅱ遺跡では前野町相当期の住居跡（3軒）が検出されている。集落から出土した土器群は南関東系の土器と北関東系の土器が共伴する様相が確認された。上座矢橋遺跡では弥生時代後期の住居跡（26軒）が検出され、出土した土器は北関東系の土器が主体となっている。御山遺跡は繩文時代晚期荒海式土器と弥生土器の包含層が検出された遺跡で、弥生土器の中には遠賀川式系の土器や東海地方西部の条痕文系土器である櫻王式系の土器が北関東系の弥生時代中期の土器と混在していることが確認された。池花南遺跡は繩文時代晚期千網式土器と弥生時代中期須和田式土器の包含層が検出されている。

手縫川上流の弥生時代の遺跡は、上流域では繩文時代晚期荒海式土器の要素を取り込んだ須和田式土器と東海系を含む西日本の弥生土器の系譜を引く土器の交錯する状況が認められる。また、手縫川中流域でも南関東系の土器と北関東系の土器が交錯する遺跡があり、これらの地域が印旛沼周辺地域における弥生時代文化圏の緩衝地帯であることを示している。

印旛沼西端から南に流出する新川沿いの台地では弥生時代中期の遺跡が相次いで確認されており、河口

域では栗谷遺跡(47)、中流域では右岸には権現後遺跡(39)、ヲサル山遺跡(38)、井戸向遺跡(41)左岸には村上遺跡群(37)、名主山遺跡(44)などが所在している。栗谷遺跡は遺跡の主要な部分が東京成徳大学のキャンパス内にあり、一部は未調査のまま緑地保存されている。栗谷遺跡では弥生時代後期北関東系土器を伴う方形周溝墓群と同時期の住居跡93軒とともに中期(宮ノ台期)の集落も検出された。権現後遺跡では弥生時代後期(久ヶ原期～弥生町期)の方形周溝墓と弥生時代後期末の住居跡73軒とともに古墳時代前期(五領期)の遺構が検出されており、特に久ヶ原式土器に続く弥生町式土器を主体としながら北関東系の土器を伴出している。この傾向はヲサル山遺跡においても同様に確認された。

井戸向遺跡では弥生時代後期の土器は東海系や畿内系のものが検出されており、方形周溝墓も周溝の一部がとぎれてしまう形態のものが確認されている。一方、村上遺跡群内の各遺跡や名主山遺跡では弥生時代後期の住居跡が検出され、北関東系の土器が主体となっていることが確認された。

新川流域の弥生時代の遺跡は、中流域の左岸にある村上遺跡群で北関東系の土器が主体となっているのに対して、右岸にある萱田地区の権現後遺跡やヲサル山遺跡では南関東系の土器を主体としながら北関東系の土器も共存している。このような状況から、新川流域の場合は中流域が弥生時代文化圏の交錯する緩衝地帯であることがわかる。

印旛沼周辺の弥生時代の土器について、印旛沼に流入する主な河川の流域ごとに遺跡の状況を観察した結果、鹿島川流域では弥生時代後期の早い段階から北関東系の土器が見られるが、手綴川や新川流域では弥生時代中期または後期の早い段階から中流域付近が南関東系の土器と北関東系の土器の交錯する地域であったことが明らかとなった。

岩名町前遺跡は鹿島川の河口付近の左岸に位置し、出土した土器は北関東系の影響を引き継いだものであった。これは同じ鹿島川河口付近の右岸に位置する江原台遺跡や鹿島川中流域の大崎台遺跡で観察された状況と同じ傾向にあることがわかる。

鹿島川流域では南関東系の土器は中期の須和田式・宮ノ台式として痕跡は残すものの、後期の久ヶ原式から前野町式の土器との共存関係では圧倒的に主体となったのは北関東系の土器であり、内容的には栃木県や茨城県における弥生土器の影響を受けたものとなっている。

岩名町前遺跡は、こうした周辺遺跡の分析結果からも北関東系の弥生時代文化圏の影響を強く受けた遺跡の一つであると考えられる。

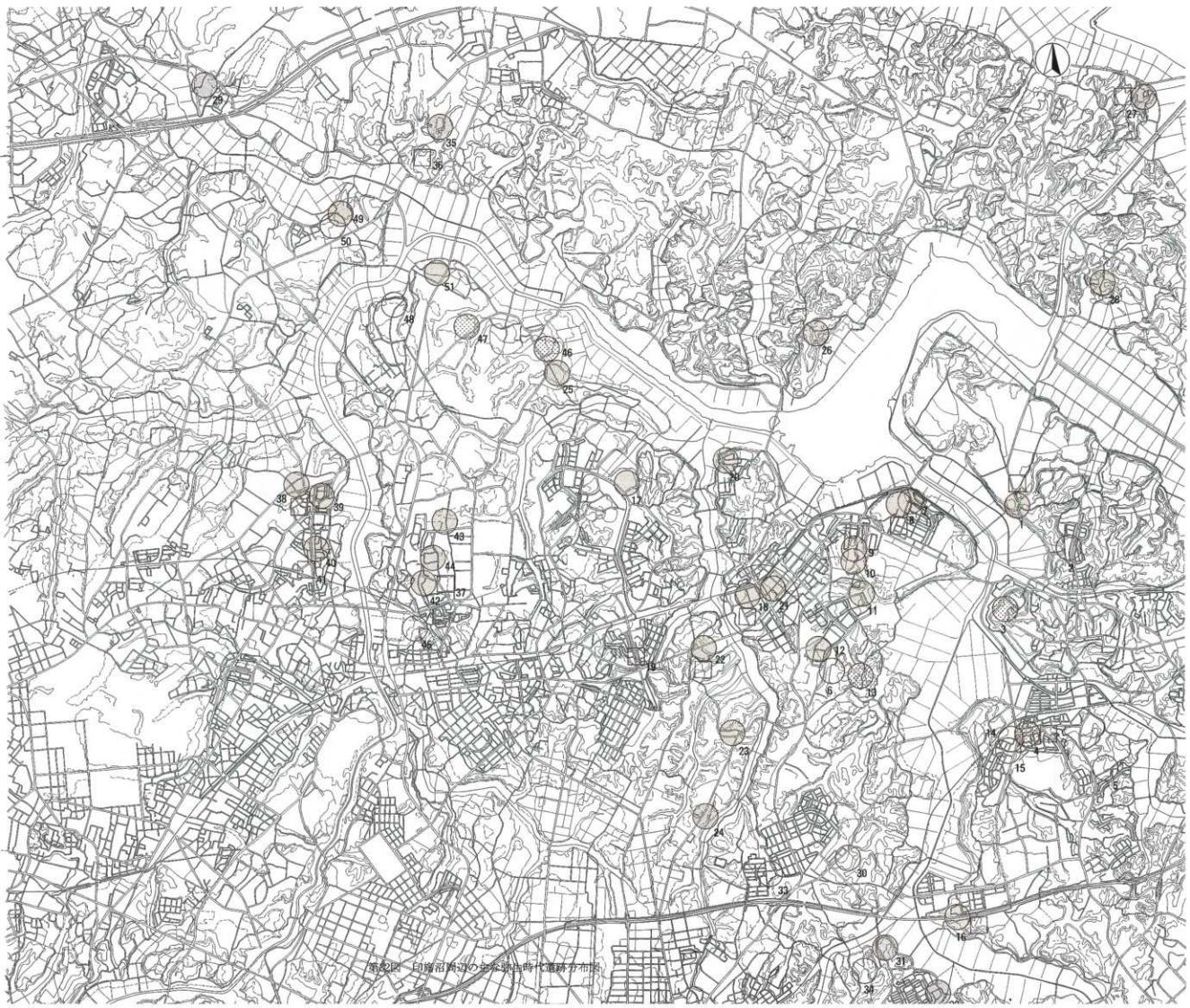
参考文献

- 佐倉市江原台遺跡発掘調査概報 千葉県教育庁文化課1973
大崎台遺跡 大崎台遺跡発掘調査団1973
八千代市村上遺跡群 財団法人千葉県都市公社1974
－第1次・第2次調査－佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書 I 1977
－考古学から見た房総文化－『3弥生時代』研究紀要3 財団法人千葉県文化財センター1978
江原台 江原台第1遺跡発掘調査団1979
八千代市権現後遺跡－萱田地区埋蔵文化調査報告書 I － 財団法人千葉県文化財センター1984
大崎台遺跡発掘調査報告書 I 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会1985
大崎台遺跡発掘調査報告書 II 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会1986

八千代市ラサル山遺跡－董田地区埋蔵文化調査報告書Ⅲ－ 財団法人千葉県文化財センター1986
八千代市井戸向遺跡－董田地区埋蔵文化調査報告書Ⅳ－ 財団法人千葉県文化財センター1987
大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅲ 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会1987
『4弥生土器Ⅱ』弥生文化の研究 雄山閣1987
八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡－董田地区埋蔵文化調査報告書Ⅴ－ 財団法人千葉県文化財センター1993
大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅳ 佐倉市教育委員会1997
『佐倉市岩名古墳群（2号墳・3号墳）現地説明会資料』 財団法人印旛都市文化財センター1999
『佐倉市岩名古墳群』広報誌フィールドブックNo. 1 財団法人印旛都市文化財センター1999
栗谷遺跡（第1分冊）－（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査Ⅰ－ 八千代市遺跡調査会
栗谷遺跡（第2分冊）－（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査Ⅱ－ 八千代市遺跡調査会2003

第1表 印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡

No.	遺跡名	所在地	時期
1	岩名町前遺跡	佐倉市岩名字町前1197他	弥生-後
2	岩名天神前遺跡	佐倉市岩名字宮前255他	弥生-中
3	佐倉城跡遺跡	佐倉市城内町	弥生-中・後
4	大崎台遺跡	佐倉市大崎台字原前1457	弥生-中・後
5	六崎貴船台遺跡	佐倉市六崎貴船台284他、春内285他	弥生-中
6	吉見台遺跡B地点	佐倉市吉見字古台739他	弥生-中
7	江原台第1遺跡	佐倉市白井忍田字江原台	弥生-後
8	江原台遺跡	佐倉市白井忍田字江原台	弥生-後
9	間野台遺跡	佐倉市白井忍間野台	弥生-後
10	古屋敷遺跡	佐倉市白井忍間野台	弥生-後
11	飯重新畠新遺跡	佐倉市飯重字新畠	弥生-後
12	生谷境掘遺跡	佐倉市生谷境掘	弥生-後
13	白井屋敷跡遺跡	佐倉市吉見字白井屋敷244他	弥生-中・後
14	寺崎向原遺跡	佐倉市寺崎向原2498他	弥生-中
15	寺崎一本松遺跡	佐倉市寺崎一本松2247他	弥生-中
16	大篠塚遺跡	佐倉市大篠塚	弥生-後
17	西ノ台遺跡	佐倉市小竹字	弥生-後
18	石神Ⅱ遺跡	佐倉市白井字石神他	弥生-後
19	上座矢橋遺跡	佐倉市上座矢橋498	弥生-後
20	八幡台遺跡	佐倉市白井忍八幡台	弥生-後
21	渡戸(A・B)遺跡	佐倉市白井忍	弥生-後
22	飯郷作遺跡	佐倉市下志津字飯郷作	弥生-後
23	畔田遺跡	佐倉市畔田	弥生-後
24	萱橋遺跡	佐倉市上座字萱橋	弥生-後
25	先崎遺跡	佐倉市先崎	弥生-後
26	戸の内(貝塚)遺跡	印旛郡印旛村戸戸	弥生-後
27	吉高家老地遺跡	印旛郡印旛村吉高家老地	弥生-後
28	仲井遺跡	印旛郡印旛村山田	弥生-後
29	清戸遺跡	印旛郡白井町清戸掘込370	弥生-後
30	御山遺跡	四街道市物井字御山1267他	弥生-中
31	西向井遺跡	四街道市山梨字西向井	弥生-後
32	中野遺跡	四街道市中野	弥生-後
33	池花南遺跡	四街道市内黒田字池花158他	弥生-中
34	相ノ谷遺跡	四街道市山梨字相ノ谷995他	弥生-中
35	船尾白幡遺跡	印西市船尾字白幡	弥生-後
36	船尾町田遺跡	印西市船尾字町田	(古墳-前)
37	村上遺跡群	八千代市村上字込ノ内他	弥生-後
38	ヲサル山遺跡	八千代市ゆりのき台7丁目他	弥生-後
39	権現後遺跡	八千代市ゆりのき台7、8丁目他	弥生-後
40	萱田遺跡	八千代市萱田	弥生-後
41	井戸戸向遺跡	八千代市萱田字井戸戸向	弥生-後
42	村上遺跡	八千代市村上	弥生-後
43	大塚遺跡	八千代市上高野字大塚2041	弥生-後
44	名主山遺跡	八千代市村上2054-1	弥生-後
45	沖塚遺跡	八千代市村上字冲塚前2095他	弥生-中
46	おおびた遺跡	八千代市保品字須賀1061他	弥生-中・後
47	栗谷遺跡	八千代市保品字栗谷2055他	弥生-中・後
48	逆水遺跡	八千代市米本字逆井1292他	弥生-中
49	佐山遺跡	八千代市佐山	弥生-後
50	田原塚遺跡	八千代市佐山字田原塚	弥生-中
51	神野遺跡	八千代市神野	弥生-後



第22図 印旛沼周辺の古墳時代・弥生時代遺跡分布図

0 (1 / 50,000) 5km

写 真 図 版





岩名町前遺跡近景(S→N)



岩名町前遺跡近景(俯瞰)



岩名町前遺跡近景(N→S)
及び1号構状遺構



1号住居跡



2号住居跡



3号住居跡

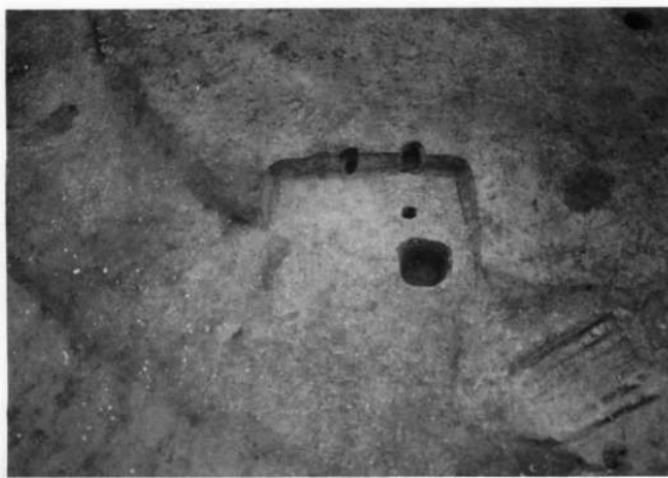
图版 4



4号住居跡



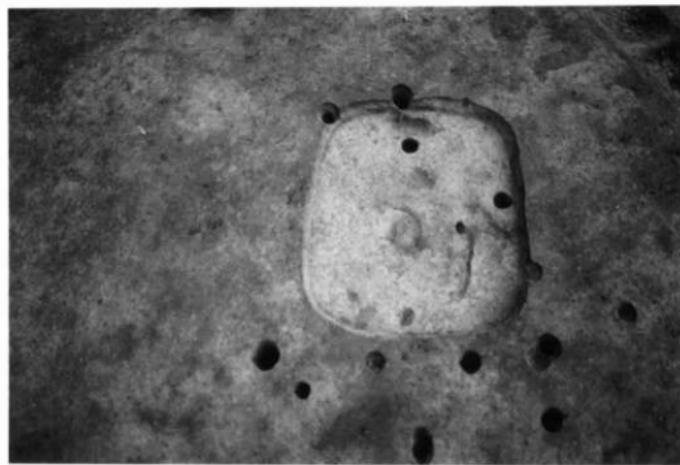
5号住居跡



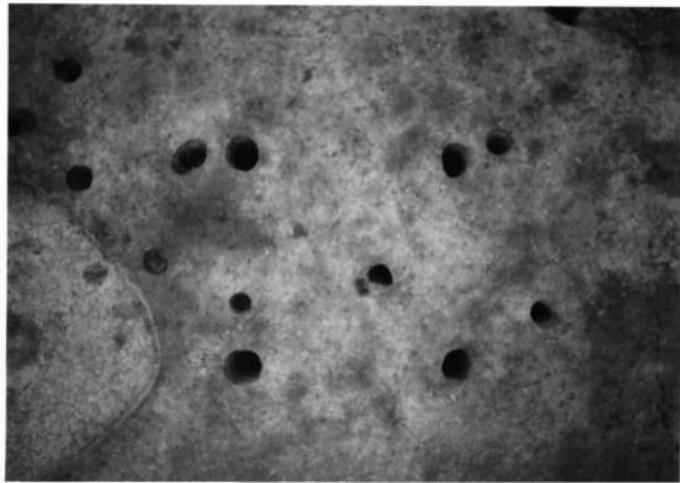
6号住居跡



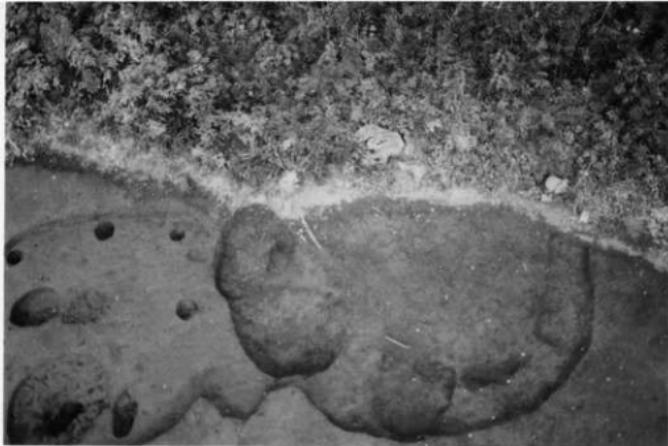
7号住居跡
方形周溝状遺構



8号住居跡



9号住居跡



円形周溝状遺構



土坑墓



2号溝状遺構



2号溝状遺構

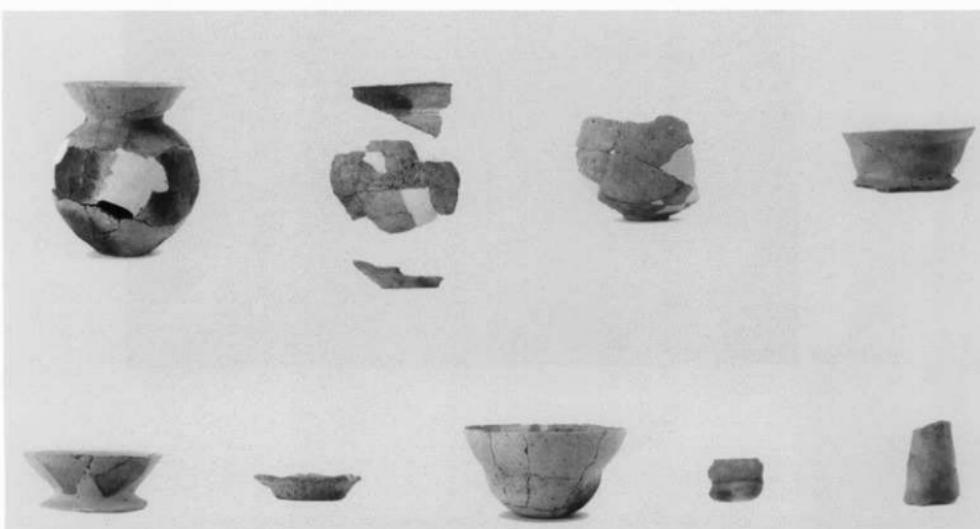


方形溝状区画

图版 8



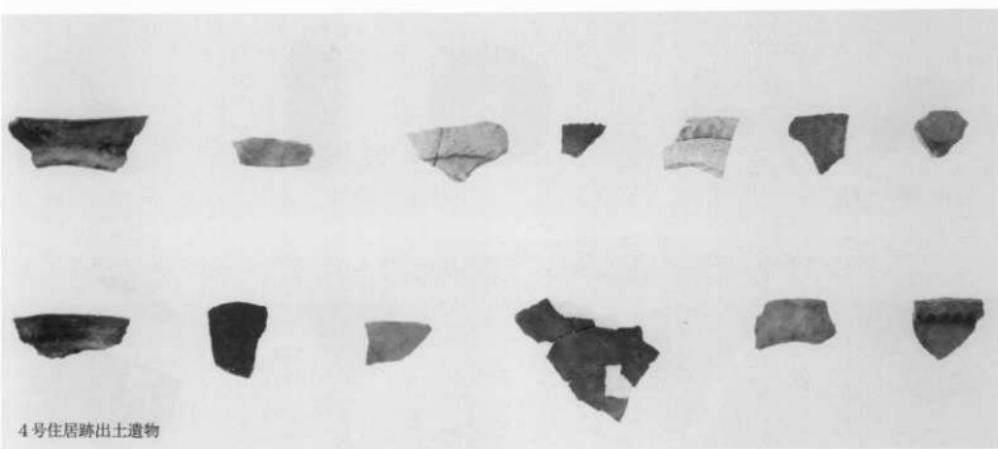
1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



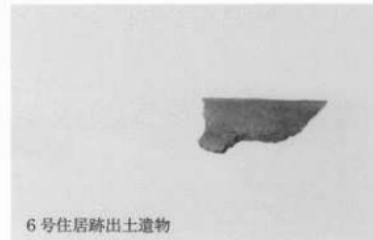
3号住居跡出土遺物



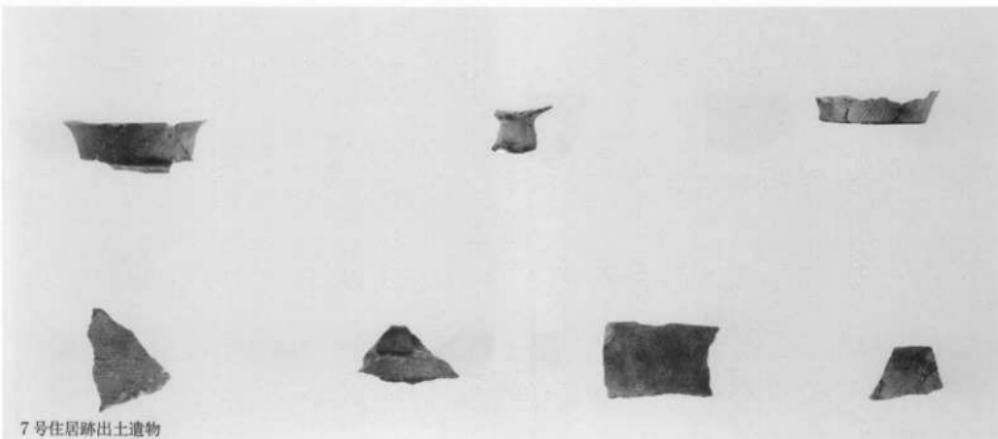
4号住居跡出土遺物



5号住居跡出土遺物

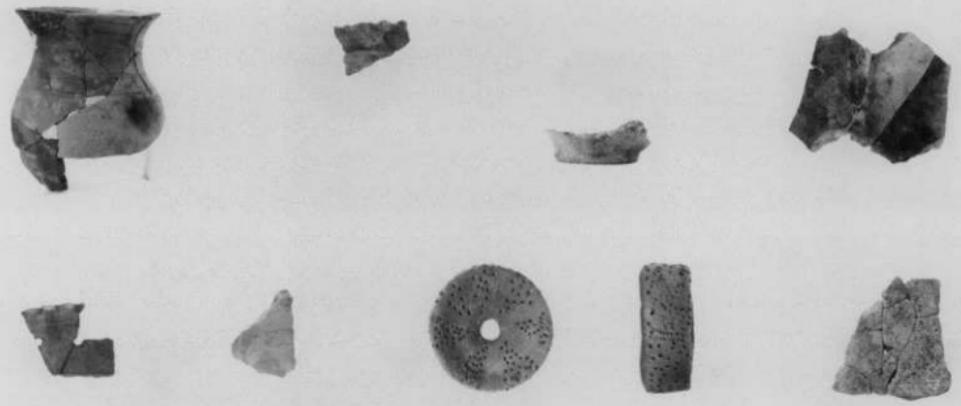


6号住居跡出土遺物

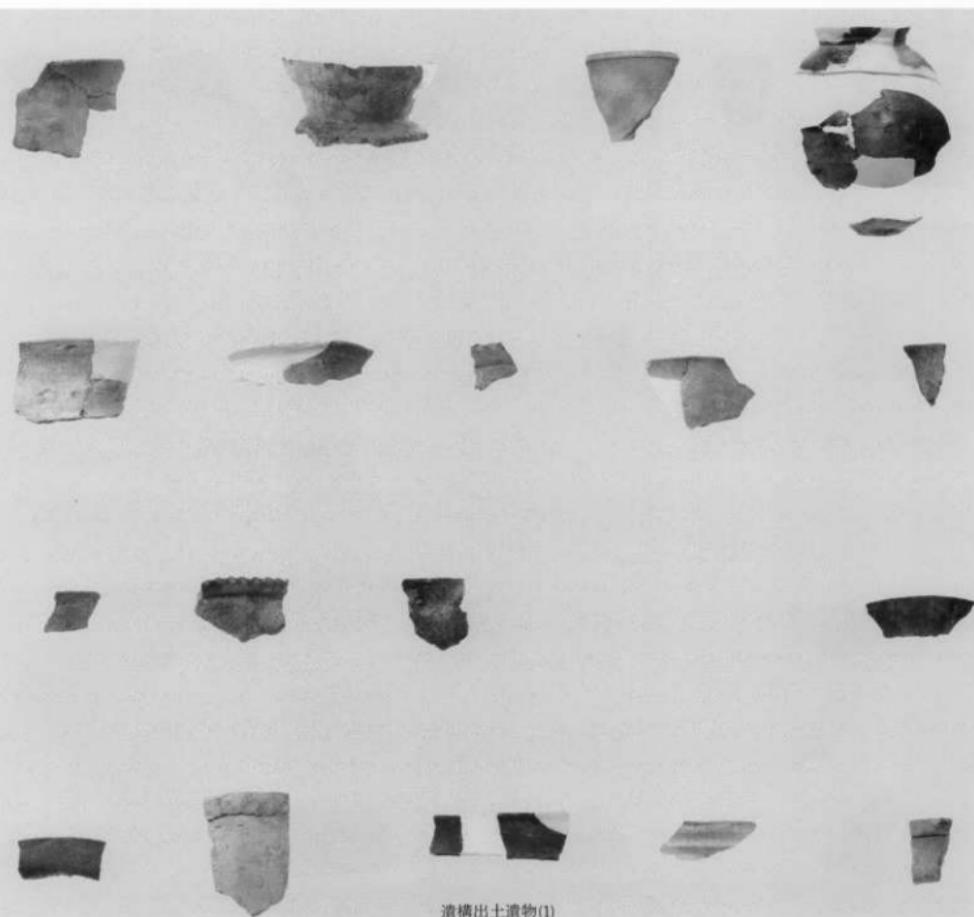


7号住居跡出土遺物

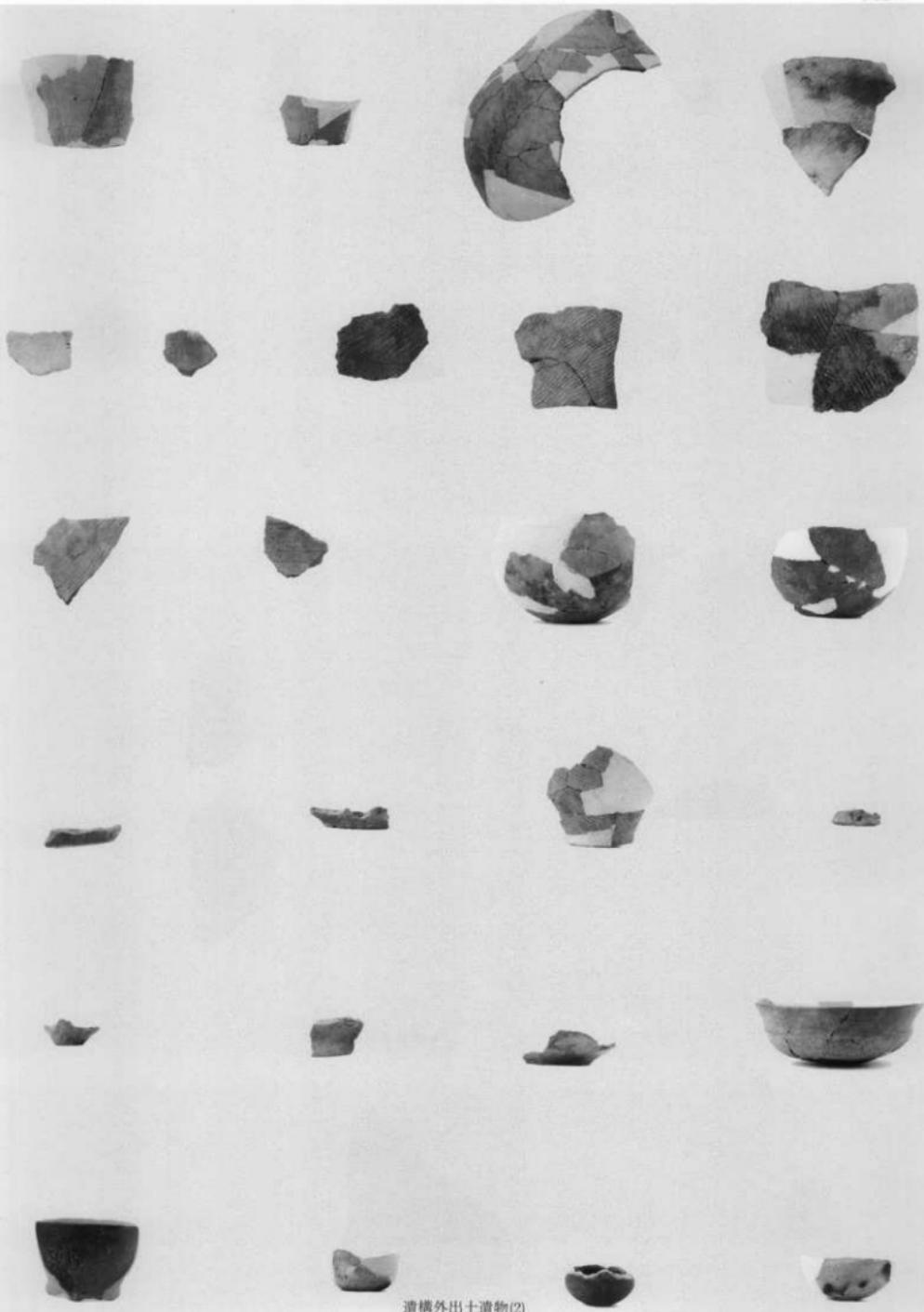
图版10



8号住居跡出土遺物



遺構出土遺物(1)



遗构外出土遗物(2)

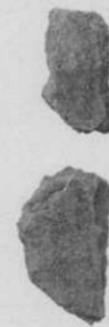
图版12



遗構外出土遺物(3)



土坑墓出土遗物



方形溝狀区画出土遗物



2号溝状遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さくらいんざいせん(きんきゅううちほうどうろせいひ)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	佐倉印西線（緊急地方道路整備）埋蔵文化財調査報告書
副書名	佐倉市岩名町前遺跡
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	
編著者名	石倉亮治・黒沢 崇
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2
発行年月日	2004年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわなまちまえいせき 岩名町前遺跡	さくらし じかど 佐倉市下根955-1他	212	042	35° 44'	140° 13'	20000701 ～ 20001031	3.800m ²	(主)佐倉印 西線道路改良 に伴う事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢台遺跡	包藏地	弥生時代 古墳時代 中・近世	住居跡 住居跡 土坑墓・溝状遺構	土器 土器	住居跡は後期 住居跡は前期

千葉県文化財センター調査報告第490集

佐倉市岩名町前遺跡

—佐倉印西線道（緊急地方道路整備）埋蔵文化財調査報告書—

平成16年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510-1
